

下 遠 田 遺 跡

一般県道友部内原線道路改良事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成27年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第398集

下^げ遠^{とお}田^だ遺跡

一般県道友部内原線道路改良事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成 27 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団



調査区全景（上空から）



第2号竖穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況（須恵器 広口壺・提瓶）

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を支える基盤として、市町村の枠を越えた広域的交流や連携の発展を見据えた主要地方道や幹線道路網の改良整備を推進しているところです。

その一環として、茨城県水戸土木事務所は、水戸市内原地区において、一般県道友部内原線道路改良事業を計画しました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である下遠田遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、下遠田遺跡は平成25年4月から5月までの2か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、下遠田遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに對し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に對し、深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣 一

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成25年度に発掘調査を実施した、茨城県水戸市五平町342-1番地ほかに所在する下遠田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成25年4月1日～平成25年5月31日
整理 平成26年12月1日～平成27年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 綿引英樹
次 席 調 査 員 綿引 博
調 査 員 田村雅樹
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員田村雅樹が担当した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IV系座標に準拠し、 $X = + 39,160 \text{ m}$ 、 $Y = + 45,480 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C…、西から東へ 1、2、3… とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c…j、西から東へ 1、2、3、…0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット PG-ピット群 SD-堀跡・溝跡 SI-堅穴建物跡 SK-土坑

遺物 DP-土製品 Q-石器・石製品


土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩・施釉

 炉・火床面

 竈部材・粘土範囲・黒色処理

 柱あたり・葦

● 土器

○ 土製品

□ 石器・石製品

---- 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m、cm、g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。黒色処理の土器については、漆塗りのみを記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 堅穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

- 7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SK 8 → SD 2 P 5 ~ P 7

欠番 SK 8

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
下速田遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	12
1 古墳時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴建物跡	12
(2) 土坑	48
2 室町時代の遺構と遺物	49
堀跡	49
3 その他の遺構と遺物	51
(1) 溝跡	51
(2) 土坑	53
(3) ビット群	54
(4) 遺構外出土遺物	54
第4節 まとめ	55
写真図版	PL 1～PL10
抄 録	

下遠田遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

下遠田遺跡は、水戸市の南西部を流れる濁沼前川ひぬままきかわの右岸に位置し、濁沼前川と支谷とに挟まれた標高33mほどの舌状台地上ぜつじょうに立地しています。

一般県道友部内原線道路改良事業に伴い、遺跡の現状保存が困難であることから、記録保存を目的として1,487㎡を発掘調査しました。調査区は、台地の先端部に位置しています。



調査の内容

調査によって、古墳時代後期たてあなたてものあと(約1,600年前)の竪穴建物跡9棟、室町時代の堀跡1条のほか、溝跡1条、土坑42基、ピット群1か所を確認しました。

出土遺物は、土師器はじき(坏・碗・壺・甕・甑・ミニチュア土器)、須恵器すえき(坏・蓋・装飾器台・広口壺・提瓶)、土師質土器はじしつどき(小皿・皿)、陶器とうき(鉢)、磁器じき(青磁皿)、土製品つちざいひん(支脚・勾玉・土玉・霰玉)、石器せきせいひん・石製品いしせいひん(砥石・紡錘車・白玉)などです。



遺跡遠景(北西上空から)



第2号竪穴建物跡 遺物出土状況



第2号竪穴建物跡 調査風景



第2号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況



第1号堀跡 完掘状況

調査の内容

調査によって、古墳時代後期の集落跡と室町時代の館に伴う堀跡が確認できました。

古墳時代の集落跡は、出土土器から6世紀中葉に存在したと考えられます。竪穴建物に竈が導入された時期のものであることが分かりました。集落の中心と考えられる最大の竪穴建物跡は、上屋が解体され、貯蔵穴へ上毛野地方（現在の群馬県）の技法とみられる須恵器の広口壺や提瓶が埋納されています。その後、ミニチュア土器や玉類を遺棄し、坏・椀類、甕類を割って順に投棄し、焼却したことが確認できました。集落廃絶の祀りの様相が分かると共に、竈の導入や須恵器の流通など、広域間の交流を通して時代の変化が垣間見られます。

室町時代の堀跡は、長さ50m以上で、方形を呈すると考えられます。14世紀前葉の土師質土器や中国製の青磁皿片などが出土しています。周辺には「原屋敷」の地名が残っており、当該地における郷村の拠点と考えられます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成23年9月28日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道友部内原線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は、平成23年10月6日に現地踏査を行い、続いて、同年11月1日及び平成24年12月17・25日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成24年12月28日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に下遠田遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成25年1月21日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく一般県道友部内原線道路改良事業地内の下遠田遺跡に関わる土木工事等の通知を提出した。これを受けて、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存の発掘調査が必要との決定を下し、平成25年2月6日、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着工前に発掘調査を実施するように通知した。

平成25年2月14日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道友部内原線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成25年2月19日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、下遠田遺跡における発掘調査の範囲及び面積等の回答をし、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成25年4月1日から5月31日まで発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

下遠田遺跡の調査は、平成25年4月1日から5月31日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月			5月		
		1	2	3	1	2	3
調査準備 遺構除根		■					
遺構調査			■			■	
遺物洗浄 写真整理		■			■		
撤収							■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

下遠田遺跡は、茨城県水戸市五平町 342-1 番地ほかに所在している。

当跡が所在する水戸市の南西部（旧内原町）は、JR 常磐線を概ね境とし、北方の友部丘陵と南方の東茨城台地に分かれている。友部丘陵は、足利山の南東部に広がる標高 70～100 m の起伏に富んだ山林地帯であるが、丘陵先端部は地形の傾斜が緩やかになり、集落や畑地が形成されている。この丘陵は、主として涸沼前川に注ぐ小河川や沢によって、偏狭な支谷や沖積地が樹枝状かつ複雑に開折されおり、丘陵内部にまで達している。一方、東茨城台地は標高 30～37 m の平坦もしくは起伏の少ない地形を呈している。この台地は、涸沼前川や涸沼川が涸沼へ流入する過程で開折された幅広な沖積低地によって分断され、舌状台地を形成している¹⁾。

友部丘陵を形成している堆積層は、下層位から海浜成の円礫層である金山砂礫層、頁岩・チャート・砂岩などの岩石からなる池野辺層、浅海成の砂層である友部層と続き、東茨城台地では、浅海成の砂層である石崎層、浅海成の細粒砂層である笠神層、内湾から浅海成の礫層やシルト層など多様に富む見和層、陸成の粘土層である茨城粘土層が堆積し、異なりをみせているが、これ以降の火山灰堆積である関東ローム層、現在の生活面も含んだ黒色土を主体とした沖積世の堆積層は共通してみられる²⁾。

当跡は、東茨城台地の西部に位置し、涸沼前川右岸のその支流で形成された支谷とに挟まれた標高約 33 m の舌状台地上に立地している。この舌状台地は、涸沼地区付近から東へ延びた涸沼前川右岸一帯の広大な範囲で、当跡はその先端部に所在している。沖積低地から台地上へは緩斜地形を呈しており、沖積低地には水田が営まれ、台地上は集落や畑地として土地利用がされている。

第2節 歴史的環境

下遠田遺跡周辺は、涸沼へ注ぐ涸沼前川水系や涸沼川水系を利用した水運に恵まれた地域であり、古くから人々の生活が営まれてきた地域である。特に古墳時代においては、県下でも有数の古墳集中地域として周知されている。

旧石器時代では、涸沼前川流域の台地上に五平遺跡³⁾（8）、湿気遺跡⁴⁾が所在し、硬質頁岩製の細石刃核や流紋岩を使った剥片が出土している³⁾。涸沼前川は友部丘陵より派生していることから、池野辺層の浸食によって流出した頁岩やチャートなどの石材は、入手が容易であったと考えられる。

縄文時代草創期から前期の遺跡は、数少ないながらも東茨城台地上に立地する傾向がみられる⁴⁾。燃糸文や貝殻糸線文土器などが出土した草創期後半から早期前半の五平遺跡や早期の犬塚南遺跡⁵⁾（13）、興国遺跡、興国東遺跡⁶⁾（15）、尖底土器底部が出土している内原南遺跡⁷⁾（70）、前期の竹ノ内遺跡⁸⁾（71）などが知られている。これらの多くは、涸沼前川支流の古矢川や小河川の上流から中流域に小規模な範囲で分布している。

縄文時代中期の遺跡は爆発的に増加し、友部丘陵にまで分布を拡大させている⁶⁾。丘陵部には有賀宿遺跡⁹⁾（48）、有賀台遺跡¹⁰⁾（50）、遠台遺跡¹¹⁾（44）、柗巷遺跡¹²⁾が、台地部には遺跡が密集する涸沼前川と古矢川との合流地点に倉田遺跡¹³⁾や根古矢遺跡¹⁴⁾が広範囲にわたり所在し、大規模な集落跡として想定されている。

縄文時代後期から晩期にかけては、遺跡が著しく減少し、友部丘陵部や東茨城台地の限定された地域に分布

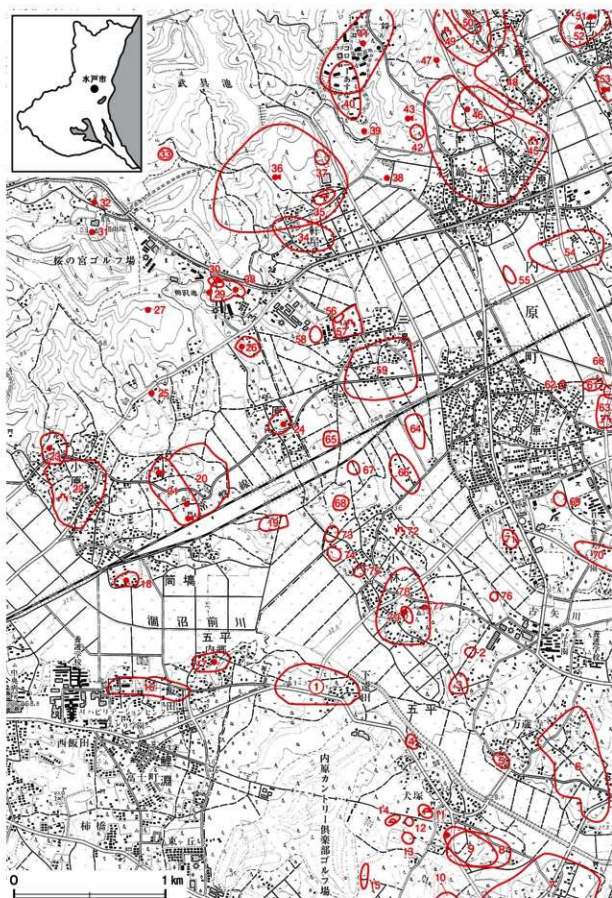
している⁷¹。丘陵部には、土偶片が出土した有賀台遺跡や遠台遺跡、権現山遺跡〈40〉が後期から晩期の遺跡として知られ、台地部には涸沼前川と古矢川の合流付近に後期の島遺跡や西遺跡が近接している。

弥生時代の遺跡は、友部丘陵部の桜川上流域に集中し、涸沼前川水系流域では、兩岸に点在している。これらの多くは、低地に面した台地上に立地しており、当時の人々が低地を活用しようとしていたことが想定できる。友部丘陵部では、八幡神社周辺古墳群〈46〉第12号墳の発掘調査に伴って、その基底部から後期の竪穴建物跡が調査されたほか、後期の土器が出土した杉崎遺跡〈34〉や権現山遺跡⁸⁾、有賀台遺跡、有賀台遺跡が所在している。一方、涸沼前川水系流域では、少量ながらも中期の土器片が出土した五平遺跡⁹⁾をはじめに、小林東遺跡〈2〉、万蔵寺遺跡〈6〉、五平内郷遺跡〈16〉、三本松遺跡〈19〉、新道池南遺跡〈73〉が所在している。この他に、小林東田1473番地の43では、水田隣接の土堤の割平時に雲母片岩製の鋳刃が、茨城町上飯沼の涸沼川底からは、有角石器が発見されている。有角石器は、茨城県から房総地域を中心に分布する中期後半の石器であるが、この分布は中期前半にみられる再葬墓の分布とはほぼ一致しており、注視されている¹⁰⁾。

古墳時代になると、地方豪族のもと幾つかの集落が治められた。涸沼川と涸沼前川の合流地点に位置する奥谷遺跡では、前期の居館跡と考えられる方形の環濠が確認されており¹¹⁾、大和政権によって国を治める国造や国内の小地域を治める伴造の地位が与えられる地方豪族もいた。また、豪族が死後葬られる古墳は、大和政権との関係によって古墳の規模や形状が定まるとした研究も進められている¹²⁾。

古墳時代の当地は、那賀国との境界に接しながらも茨城国に属していたとされており、概すれば、友部丘陵部は那賀国であったと考えられている¹³⁾。当地周辺の古墳の分布は、友部丘陵部と古谷川を含む涸沼前川流域に多く所在するが、友部丘陵部では、中期から後期にかけて一定の地域に造営されており、涸沼前川流域では、群集墳化する後期に増大する特徴がみられる。両地域とも明確な前期の古墳は確認されていないが、中期以降の古墳は多く認められている。

友部丘陵部では、支丘ごとに前方後円墳を中心とした古墳群が多く形成されている。二所神社古墳と舟塚古墳〈53〉は、周辺地域では最大級の前方後円墳である。前者は全長80mほど、後者は全長75mほどで、二段構成をもつ墳丘などの特徴から前者は5世紀代、後者は6世紀前半代の造営と推定されている。また、前方後円墳6基、帆立貝形・造出付円墳1基、円墳9基で構成される牛伏古墳群〈51〉は、初期古墳の形状とは若干異なるものの、後方が撥状に開く著墓タイプの第17号墳や前方部が発達しながらも、小型化した第2号墳など、前方後円墳の形状がバラエティーに富んでいる。少なくとも5世紀後半から6世紀後半にわたり、同じ地域に造営し続けられた結果といえる。第4号墳は発掘調査の結果、花崗岩を用いた横穴式石室の検出や形象埴輪や円筒埴輪・太刀・鉄鎌・鎌・雲珠をはじめ、6世紀後半の須恵器・土器器が出土している¹⁴⁾。これらの古墳群は、友部丘陵部の中でも大規模なものであり、水戸市愛宕山古墳から継承される那賀国造の墓域とする説¹⁵⁾や那賀国造一族が任命された伴造の墓域¹⁶⁾とする説がある。コロニー古墳群〈41〉は、帆立貝形の前方後円墳4基と円墳11基で構成されている。前方後円墳2基と円墳4基が発掘調査され、埋葬施設として割竹型木棺を伴う粘土椀の検出や人物・水鳥・鶏・馬などの形象埴輪・円筒埴輪・太刀・刀子・鉄鎌・6世紀代の土器器・須恵器器が出土している¹⁷⁾。八幡神社周辺古墳群は、前方後円墳2基を伴う13基で構成される。第12号墳及び第11号墳(内原81号墳)が発掘調査され、木棺直葬と考えられる主体部の検出や直刀・刀子・管玉・ガラス玉などが出土している¹⁸⁾。杉崎古墳群〈36〉は前方後円墳4基、円墳35基以上で構成される。第40号墳が発掘調査され、木棺直葬の主体部の検出や立花受孔を設けた石枕と立花が出土している。5世紀後半から6世紀初頭の造営と考えられている。なお、周辺からは滑石製の子持勾玉が採取されている¹⁹⁾。こうした支丘ごとの古墳群の分布は、二所神社古墳と舟塚古墳、牛伏古墳群を中心とした地方豪族の連合体が形



第1図 下遠田遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「笠間」）

表1 下遠田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	下遠田遺跡		○		○	○		41	コロニー古墳群				○			
2	小林東遺跡		○			○	○	42	鷹ノ巣遺跡		○			○	○	
3	塔ノ上遺跡			○	○			43	鷹ノ巣南古墳				○			
4	川梅遺跡				○			44	遠台遺跡		○	○	○	○	○	
5	ヲモテ遺跡		○			○	○	45	中原館跡						○	
6	万蔵寺遺跡		○	○	○	○	○	46	八幡神社周辺古墳群			○				
7	蔵田千軒遺跡		○	○	○	○		47	遠台古墳				○			
8	五平遺跡		○	○	○	○		48	有賀宿遺跡		○	○	○	○		
9	犬塚古墳群				○			49	塚原城跡						○	
10	権現古墳群				○			50	有賀台遺跡		○	○	○	○		
11	犬塚A庚申塚群							51	牛伏古墳群				○			
12	犬塚西遺跡						○	52	牛伏塚群							○
13	犬塚南遺跡		○				○	53	舟塚古墳群				○			
14	犬塚B庚申塚群							54	向原遺跡					○		
15	興国東遺跡		○			○		55	神明戸遺跡					○		
16	五平内郷遺跡		○	○	○			56	宮前遺跡		○			○		
17	五平古墳群				○			57	三湯館跡						○	
18	塚崎古墳				○			58	沢山遺跡					○	○	
19	三本松遺跡			○		○		59	舞台遺跡		○		○	○		
20	小原遺跡		○	○	○	○		60	館遺跡						○	
21	一本松古墳群				○			61	トソ遺跡		○		○	○		
22	小原城跡						○	62	下坪遺跡							時期不明
23	高寺古墳群				○			63	江川館跡						○	
24	原坪古墳群				○			64	西川遺跡		○		○			
25	喜平塚古墳				○			65	舞台西遺跡					○		
26	原古墳				○			66	竜開遺跡		○			○		
27	大日山古墳群				○		○	67	向山遺跡		○		○	○		
28	三軒屋古墳群				○			68	新道池北遺跡						○	
29	柳沢古墳群				○			69	スワ遺跡		○				○	
30	三軒屋塚群							70	内原南遺跡		○		○	○		
31	和尚塚古墳				○		○	71	竹ノ内遺跡		○		○	○	○	
32	和尚塚古墳				○			72	小林館跡						○	
33	前峰遺跡		○		○			73	新道池南遺跡		○	○	○	○	○	
34	杉崎遺跡		○	○	○	○	○	74	遠中前遺跡		○		○	○	○	
35	八幡前塚群							75	中の内遺跡						○	
36	杉崎古墳群				○			76	三枚方遺跡		○			○	○	
37	富士山下遺跡				○			77	六部塚							○
38	鷹ノ巣古墳				○			78	小林遺跡					○	○	○
39	杉崎権現古墳				○			79	大塚古墳群				○			
40	権現山遺跡		○	○	○											

成された結果と考えられている³⁰⁾。

涸沼前川水系域の古墳は、友部丘陵部と接する小原地域などで少数の前方後円墳が確認されているが、大多数が円墳である。論田塚古墳群は、基盤整備事業によって破壊されたため詳細は不明であるが、立花受孔を持たない石枕・直刀・鉄鏝・鏡が出土しており、5世紀後半代の造営と推定されている³¹⁾。ドンドン塚古墳の主体部は、凝灰岩製の切石を用いた横穴式石室で、墳丘上からの埴輪敷数と石室内から直刀・刀子・鉄鏝・勾玉・ガラス製の小玉・切子玉が出土している。6世紀後半から7世紀初頭の造営と考えられている³²⁾。権現古墳群(10)は円墳4基が現存しているが、前方後円墳2基、円墳5基については開発によって失われている。第11号墳は陸橋部を伴っていたものの主体部は発見されず、6世紀後半から7世紀の土師器片がわずかに出土したのみである³³⁾。大塚古墳群(79)は多くが湮滅し、現存は円墳3基のみである。第3号墳から石枕が発見されている³⁴⁾。犬塚古墳群(9)は涸沼前川右岸の舌状台地上に立地し、円墳2基を含む7基から構成されるが、付近の庚申塚も含んでいる可能性もあり、その総数は明確ではない。第7号墳は五平遺跡の調査時に発見され、周溝の一部と主体部が調査された。主体部は花崗岩の平石を用いた横穴式石室で、その構造から6世紀後半から7世紀前半の造営と推定されている³⁵⁾。当地に最も近い五平古墳群(17)は、15m以下の円墳6基で構成されていた小規模な群集墳である³⁶⁾。高等古墳群(23)の第2号墳は、花崗岩の削石を用いた片袖式の横穴式石室で、主体部内から直刀・鉄鏝・刀子・鐔・銀環・玉類・提振器が出土している。7世紀前半の造営と推定されている³⁷⁾。

集落においては、前期から中期にかけて、友部丘陵部と涸沼前川水系域とでは、その数が均衡しているが、前方後円墳の数量や集落の規模からして友部丘陵部に優位性があると考えられている³⁸⁾。後期になると、友部丘陵部の集落数はほぼ変わらず継続されるが、涸沼前川水系域では集落が増加の傾向がみられ、何らかの社会的変化を背景として、これらの地域が開発されていったと考えられる。あるいは、茨城国内の緑辺部開発が、当地周辺にも達した可能性もある。

奈良・平安時代においては、当地は茨城県茨城郷に属していたとされているが、式内社有賀神社が所在する友部丘陵部は那珂郡安賀郷であったとされている³⁹⁾。遺跡の分布は、友部丘陵部・涸沼前川水系域でも沖積地に面した台地縁辺に立地する傾向がみられる。これらの中には広域な集落と狭域の集落がみられ、それらの集落を陸路が結ぶ景観が何われる。例えば、広域な万蔵寺遺跡、小林遺跡(78)、舞台遺跡(59)、杉崎遺跡の間には塔ノ上遺跡(3)、新道池南遺跡、舞台西遺跡(65)、宮前遺跡(56)などの狭域な集落が存在し、それぞれを現代にも残る陸路が開設されている。こうした陸路は、生産遺跡である木葉下窯跡群、大淵窯跡なども結びついており、さらには官道である東海道へ接続して郡内外の交通網が整備されたと考えられる。広域な遺跡の中には、平面視の出土によって考察される郷内での中心的な集落もみられ、郷長集落とされる大塚新地遺跡や富豪集落である蔵田千軒遺跡(7)も存在している⁴⁰⁾。また、仏教普及の影響によって有賀台遺跡や塔ノ上遺跡では火葬骨を埋納した蔵骨器が出土し、遠台遺跡からは瓦塔片が採集されている⁴¹⁾。

鎌倉・室町時代の当地は、小鶴荘(後の穴戸荘)に属していたと考えられており、その範囲は涸沼前川及び小原地区以西を主とした友部・岩間の両地区に該当する⁴²⁾。当荘は、常陸平氏によって運んでも12世紀後半には立荘されていたが、後に八田(後の小田)氏庶流の穴戸氏の所領となっている。

城館跡は、穴戸氏と同じく鎌倉公方奉公衆である黒見氏の小原城跡(22)⁴³⁾や八田氏家臣堀氏の三湯館跡(57)に対し、江戸氏家臣国井氏の中原館跡(45)をはじめとして江戸氏の支城とされる塚原城跡(49)、江川館跡(63)、小林館跡(72)が存在している⁴⁴⁾。これら城館跡の対峙線と涸沼前川とが、即ち穴戸荘の境界と考えられ、穴戸氏と江戸氏の所領の狭間と考えられる。

註

- 1) a 齊藤弘道「一般県道友部内原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告 五平遺跡 蔵田千軒遺跡 椎現古墳群」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第67集 財団法人茨城県教育財団 1991年3月
b 友部町史編さん委員会『友部町史 友部町 1990年3月
- 2) 日本の地質「関東地方」編集委員会『関東地方』日本の地質 3 共立出版 1986年3月
- 3) 加藤雅英ほか「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 東栖戸古墳 塚原古墳群 湿気遺跡 大塚新地遺跡 松原遺跡 南原古墳」Ⅲ〔茨城県教育財団文化財調査報告〕Ⅲ 財団法人茨城県教育財団 1981年3月
註1-aに同
- 4) 内原町史編さん委員会『内原町史 通史編 内原町 1996年3月
- 5) 根本康弘ほか「蔵田千軒遺跡発掘調査報告書」〔茨城県東茨城郡内原町埋蔵文化財調査報告〕第2集 内原町教育委員会 1990年2月
- 6) 註4に同
- 7) 註4に同
- 8) a 井博幸ほか「茨城県立コロニーあすなろ地内古墳群発掘調査報告書」茨城県生活福祉部 1980年3月
b 大川清ほか「茨城県内原町杉崎コロニー古墳群」日本窯業史研究所 1980年3月
- 9) 註1-aに同
- 10) 註4に同
- 11) 豊源和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告 奥谷遺跡 小鶴遺跡」(上・下)〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第50集 財団法人茨城県教育財団 1991年3月
- 12) 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』10号 1961年10月
- 13) 註4に同
- 14) 井博幸ほか「牛伏4号墳の調査」内原町教育委員会 1999年9月
- 15) 水戸市史編さん委員会『水戸市史』上巻 水戸市 1963年10月
- 16) 註4に同
- 17) 註9に同
- 18) a 伊藤重敏「八幡神社周辺古墳群12号墳発掘調査報告書」内原町教育委員会 1985年3月
b 能島清光ほか「八幡神社周辺古墳群(内原81号墳)他発掘調査報告書」内原町教育委員会 1997年3月
- 19) 註4に同
- 20) 註14に同
- 21) 註4に同
- 22) 註4に同
- 23) 註4に同
- 24) 註4に同
- 25) 註1-aに同
- 26) 註1-bに同
- 27) 註1-bに同
- 28) 註4に同
- 29) 中山信名『新編常陸国誌』峯書房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 30) 川井正一「内原町蔵田千軒遺跡出土の陶甎について-茨城県内陶甎集成-」〔内原町史研究〕創刊号 内原町史編さん委員会 1992年3月
- 31) 註4に同
- 32) 註1-bに同
- 33) 註1-bに同
- 34) 註4に同

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

下達田遺跡は、水戸市の南西部を流れる酒沼前川の右岸に位置し、酒沼前川と支谷に挟まれた標高約33mの舌状台地上に立地している。酒沼前川右岸一帯の広大な舌状台地の先端部に所在し、調査区は遺跡範囲の中央部南域に該当する。調査面積は1,487㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、竪穴建物跡9棟（古墳時代）、堀跡1条（室町時代）、溝跡1条（江戸時代）、土坑42基（古墳時代2、時期不明40）、ピット群1か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に28箱分が出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・碗・壺・甕・甔・ミニチュア土器）、須恵器（坏・蓋・装飾器台・広口壺・提瓶）、土師質土器（小皿・皿）、陶器（鉢）、磁器（青磁皿）、土製品（支脚・土玉・棗玉）、石器・石製品（砥石・紡錘車・白玉）などである。

第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦面にあたるB2c0～B2d0区にテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。土層は12層に分層できる。土層観察は以下のとおりである。

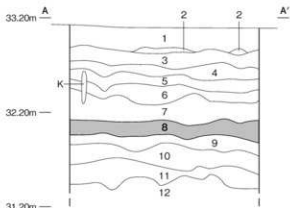
第1層は黒褐色の現在の耕作土で、層厚は20～28cmである。

第2層は褐灰色の旧耕作土で、層厚は8cmほどであるが、調査区西域では残存していない区域もある。江戸時代の遺物片を包含していたことから、江戸時代以降の耕作土と考えられる。

第3層は褐色の土層で、ローム粒子を少量含み、粘性・締まりはともに普通である。層厚は10～20cmである。

第4層はにぶい黄褐色のソフトローム層で、白色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに普通である。層厚は8～18cmである。

第5層は明黄褐色のハードローム層で、白色粒子・ガラス質粒子を微量に含み、粘性は普通、締まりは強い。層厚は7～16cmである。



第2図 基本土層図

第6層は黄褐色のハードローム層で、白色粒子を微量に含み、粘性は普通、締まりは強い。層厚は7～16cmである。

第7層は明黄褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量に含み、粘性は普通、締まりは極めて強い。層厚は10～34cmである。

第8層はにぶい黄褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量に含み、粘性は普通、締まりは極めて強い。層厚は10～34cmである。色調がやや暗いことから、第2黒色帯と思われる。

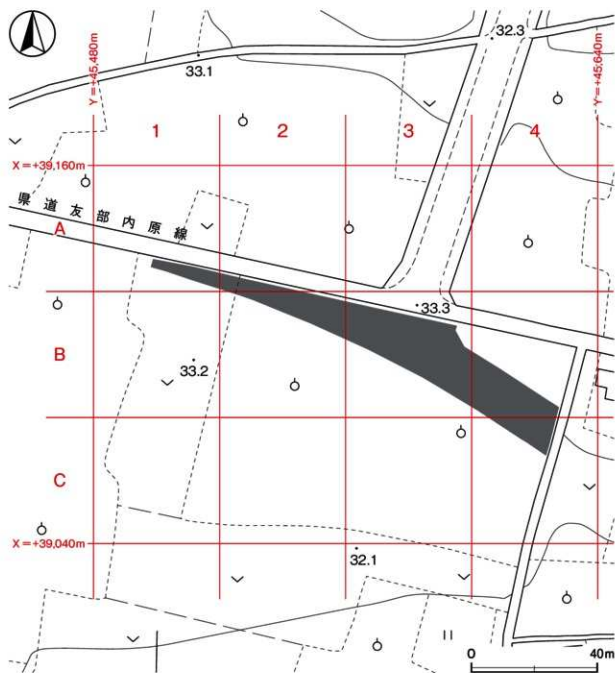
第9層は黄褐色のハードローム層で、赤色粒子・ガラス質粒子を微量に含み、粘性は普通、締まりは強い。層厚は10～34cmである。

第10層は明黄褐色のハードローム層で、鹿沼軽石を微量に含み、粘性は普通、締まりは強い。層厚は10～38cmである。

第11層はにぶい黄褐色のハードローム層で、鹿沼軽石を少量含み、粘性は普通、締まりは強い。層厚は4～34cmである。

第12層は明黄褐色の鹿沼軽石層で、粘性は弱く、締まりは極めて強い。層厚は10～34cmである。

遺構は、第3層の上面で確認できた。



第3図 下遠田遺跡調査区設定図(水戸市都市計画図2,500分の1)より

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡9棟、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第4・5図）

位置 調査区中央部のB2b7区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第18号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南半分が調査区外へ延びているため、北西・南東軸は5.31mで、北東・南西軸は3.12mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-36°-Eである。壁高は34～43cmで、ほぼ直立している。中央部に攪乱を受け、床面が壊されている。

床 平坦で、攪乱部を除いて、全面が踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北東壁中央の南東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは164cm、燃焼部幅は56cmである。袖部は、床面に粘土ブロックや焼土ブロックを含んだ第8・9層を積み上げて構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さである。火床面は床面が火熱を受け、赤変硬化し第10層を形成している。煙道部は壁外に60cmほど掘り込まれ、火床部から外傾している。煙道部には袖部と同質の粘土が貼り付けられており、薄く残存している。第6層は袖部の崩壊土と考えられることや第1～4層が天井部材や内壁崩落及び煙道部からの流入土であることから、自然崩落によって壊れている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------------|---------|-----------------------------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック少量（天井部材崩落土） | 6 灰黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量（袖部材崩壊土） |
| 2 褐灰色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量（天井部材崩落土） | 7 明赤褐色 | 粘土ブロック中量（袖部内壁） |
| 3 灰黄褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量（流入土） | 8 にんじき色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量（袖部構築土） |
| 4 赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土ブロック少量、ローム粒子微量（天井部内壁崩落土） | 9 灰黄褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量（袖部構築土） |
| 5 褐灰色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 10 明赤褐色 | ローム層被熱部分（火床） |

ピット 2か所。P1・P2は深さ52～64cmで、配置から支柱穴と考えられる。覆土は、ロームブロックを含んだ締まりが弱い土層であることから、柱材を抜き取った後に埋め戻されている。

ピット土層解説（P1・P2共通）

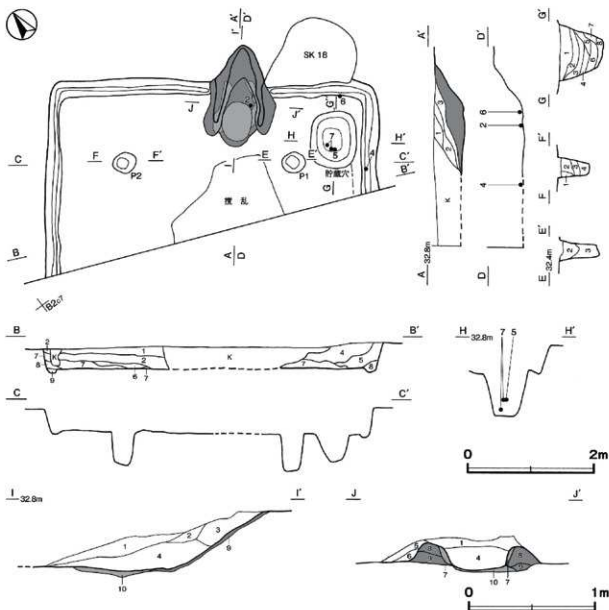
- | | | | |
|--------|-------------------------|---------|-------------------|
| 1 明黄褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック少量 | 3 にんじき色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック・炭化物少量 | 4 黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック多量 |

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長軸90cm、短軸75cmの隅丸長方形で、深さは69cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。覆土は8層に分層でき、第1～7層は粗い土質でロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。5～7の層は同一個体と思われ、破断面が火熱を受けていることから、壊された後に二次焼成を受け、投棄されたものと思われる。第8層は鹿沼パミスを含んだ締まりが強い土層で、最終段階では当層の上面が底面であった可能性がある。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|----------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | 6 黒色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 黒色土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 炭化材少量 |
| 3 黒褐色 | 黒色土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量 | 8 浅黄褐色 | 炭化パミス中量, ロームブロック・黒色土ブロック少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量, 黒色土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 5 黒褐色 | 黒色土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, ロームブロック微量 | | |

覆土 9層に分層できる。第1～3層は黒色土を主体とした自然堆積で、第3層には建材崩落土の流出土が含まれている。第4・5層はロームブロックが含まれ、第6・7層はロームブロックと焼土ブロック・炭化材が含まれていることから段階的に埋め戻されている。第8層は流入土である。第9層は壁溝の覆土で、この層下はハードローム層を掘り込んだ面を踏み固め、床としている。



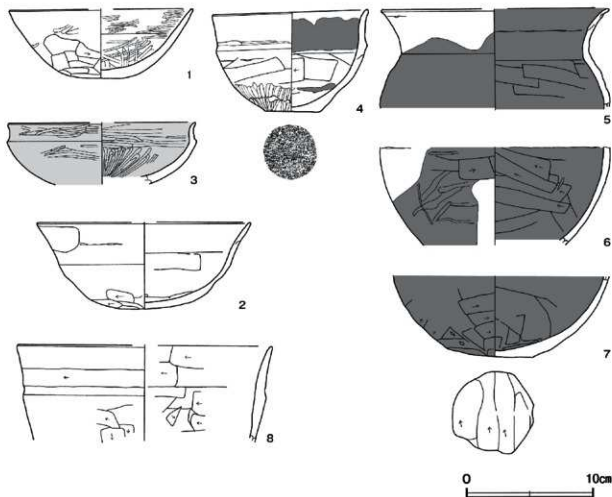
第4図 第1号竪穴建物跡実測図

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量、黒色土ブロック・焼土ブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子少量	7 にいり黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化材微量
3 暗褐色	粘土粒子中量、黒色土ブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	8 灰黄褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
4 にいり黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	9 にいり黄褐色	ローム粒子・黒色土粒子中量
5 灰黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量		

遺物出土状況 土師器片 86 点（坏 18、碗 1、鉢 1、甕類 65、瓶、1）、須恵器片 1 点（甕類）が、全城に散在した状態で出土し、特に第 6・7 層からの出土が多く、破片は二次焼成を受けた遺物が多くみられる。接合関係が乏しいことから壊された後に投棄されていると思われる。4 の碗は、底部が第 8 層に埋もれた状態で南東壁際から出土している。底部を除いた上部は二次焼成を受け、内容物を含んでいた痕跡が確認できることから、遺棄されたと考えられる。

所見 甕の第 6 層の袖部の崩壊土や覆土第 8 層の流入土から、上層解体後に若干の時間が経過してから埋め戻されたと考えられる。4 の碗は、埋め戻しの段階で二次焼成を受けた可能性があり、その後、第 3・4 層が埋め戻されている。時期は、出土土器から 6 世紀中葉に比定できる。



第 5 図 第 1 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[146]	5.5	-	長石・石英・雲母・針状物質	赤褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ磨き	覆土下層	20% 二次焼成
2	土師器	坏	[169]	6.9	-	長石・石英・雲母・針状物質	赤褐色	普通	口縁部内・内面ヘラナデ 底部外面ヘラナデ磨き	覆土下層	30% 一次焼成
3	土師器	坏	[148]	(4.9)	-	雲母・針状物質・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外・内面ヘラナデ後磨き	覆土下層	30%
4	土師器	輪	123	8.2	4.0	長石・石英・針状物質・副礫	明赤褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 底部外・内面ヘラナデ後磨き	覆土下層	95% 付着 内容物痕跡 一次焼成
5	土師器	甕	[180]	(8.0)	-	長石・石英・針状物質	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 底部外面焼成による劣化のため不明 内面ヘラナデ	貯蔵穴	10% 6・7 と同一群体 一次焼成
6	土師器	甕	-	(7.8)	-	長石・石英・針状物質	にぶい赤褐色	普通	底部外面ヘラナデ後磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	10% 5・7 と同一群体 一次焼成
7	土師器	甕	-	(6.5)	6.3	長石・石英・針状物質	にぶい赤褐色	普通	底部外面ヘラナデ後磨き 内面ヘラナデ 底部ヘラナデ	貯蔵穴	10% 5・6 と同一群体 一次焼成
8	土師器	瓶*	[201]	(7.7)	-	長石・雲母・針状物質・副礫	褐色	普通	外・内面ヘラナデ	覆土下層	5% 一次焼成

第2号竪穴建物跡 (第6～14図)

位置 調査区中央部のB 3d3区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第9号竪穴建物跡を掘り込み、第19・21号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は6.58mで、短軸は6.35mのほぼ方形である。主軸方向はN-44°-Wである。壁高は43～48cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床であるが、竈の周辺部と出入り口部の周辺が若干高くなっており、壁際を除いて踏み固められている。貼床は、第9層を埋土して構築している。北東壁下と南西壁下の一部で壁溝を確認した。北東床や北西床、南西床で、溝3条が確認できた。壁下からP2～P4付近に向かって延びている。長さ94～118cm、幅29～32cm、深さ11～14cmで、断面はU字状を呈している。覆土はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。間仕切りと考えられる。

溝1土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・黒色土ブロック中量

溝2・3土層解説

1 にぶい赤褐色 ロームブロック・黒色土ブロック中量

竈 2か所。竈1は北西壁の中央部、竈2は北東壁の中央部に付設されている。竈1は火床部と煙道部のみを確認し、袖部は確認できなかった。火床部は、砂質状の粘土が含まれる第3層下から、長さ112cm、幅82cmの規模で確認できた。火熱を受けた第5層上面が赤変硬化し、第4層の火床面を形成している。煙道部は壁外に16cmほど掘り込まれ、北西壁中段から外傾している。砂質状の粘土が含まれる第1～3層の堆積層で閉塞されている。竈2は、焚口部から煙道部までは128cm、燃焼部幅は38cmである。袖部は第11層を基部として、砂質状の粘土を含んだ第6～9層を積み上げ、もしくは貼り付けて構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さである。火熱を受けた第11・13層上面が赤変硬化し、第10層の火床面を形成している。火床面は火熱を受け、基部及び構築材の一部が赤変硬化している。煙道部は壁外に15cmほど掘り込まれ、火床部から外傾している。遺存状態から、竈1から竈2へ作り替えられており、竈2の構築時には、第13層の貼床上面に第12層を積み上げて壁面の一部を埋め戻してから、竈を構築している。竈2の第4・5層は袖部の崩壊土と考えられることや、第1～3層が天井部材や内壁崩落及び煙道部からの流入土であることから、自然崩落によって壊れている。

電1土層解説

- | | |
|--------|---------------------------|
| 1 黒 褐色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量 |

- | | |
|----------|--------------------------|
| 3 にふい黄褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 赤 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 (火床) |
| 5 にふい黄褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 (貼床構築土) |

電2土層解説

- | | |
|----------|---------------------------------|
| 1 にふい黄褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子少量(天井部材崩落土) |
| 2 にふい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量、黒色土粒子微量(天井部内壁崩落土) |
| 3 にふい橙褐色 | 焼土粒子・粘土粒子中量、炭化物・ローム粒子少量(流入土) |
| 4 褐 色 | ローム粒子・粘土粒子少量(袖部材崩壊土) |
| 5 褐 灰色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量(袖部材崩壊土) |
| 6 赤 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量(袖部内壁) |
| 7 褐 灰色 | 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子中量(袖部構築土) |

- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 8 灰 黄褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量(袖部構築土) |
| 9 にふい黄褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量(袖部構築土) |
| 10 明 赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量(火床) |
| 11 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量(袖部基部) |
| 12 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 13 にふい黄褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量(貼床構築土) |

ピット 6か所。P1～P5は深さ59～67cmで、配置から主柱穴と考えられる。P1～P4は5層に、P5は2層に分層できる。柱痕に相当する第1・2層はロームブロックを含み締まりが弱いことから、柱材を抜き取った後に埋め戻されている。第3～5層は比較的締まりが強いことから掘方への埋土と考えられる。P5の第6・7層は、締まりが強いことから掘方への埋土の残存と考えられ、P5からP1へ建て替えられている。P6は、深さ17cmと浅いが、南東壁に向かって壁が外傾していることや周辺が踏み固められていることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は単一層であるが、P1～P4の第1層に似ていることから柱材を抜き取った後に埋め戻されている。

ピット土層解説 (P1～P6共通)

- | | |
|----------|---------------------------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、炭化物微量 |
| 2 にふい黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 |
| 3 黄 褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量 |

- | | |
|----------|---------------------|
| 4 明 黄褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック微量 |
| 5 にふい黄褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック少量 |
| 6 褐 色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 |
| 7 黒 褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 |

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長軸93cm、短軸75cmの隅丸方形で、深さは114cmである。底面は凸状に窪み、壁は外傾している。覆土は4層に分層できる。土質が粗くロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。11・16の環は破片であることから、投棄されている。第4層は締まりが強いことから、最終段階では当層の上面を底面としていた可能性がある。42の広口壺や43、44の提瓶は、第4層の上面から出土している。いずれも二次焼成を受けてから、遺棄されたと考えられるが、祀りに関わる埋納の可能性もある。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------|---------------------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 |
| 2 黒 褐色 | 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量 |

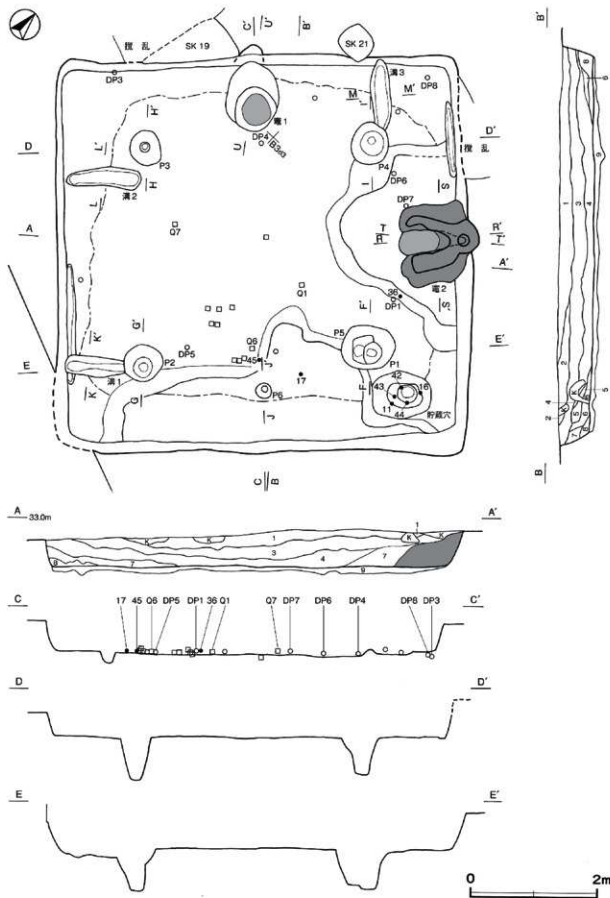
- | | |
|----------|---------------------|
| 3 褐 灰色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック微量 |
| 4 にふい黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量 |

覆土 8層に分層できる。第1～3層は黒色土を主体とした自然堆積である。第4層はロームブロックが比較的多く含まれ、第5～7層はロームブロックと焼土ブロックや炭化材・炭化物が含まれていることから、段階的に埋め戻されている。第8層は流入土で、第9層は貼床の構築土である。

土層解説

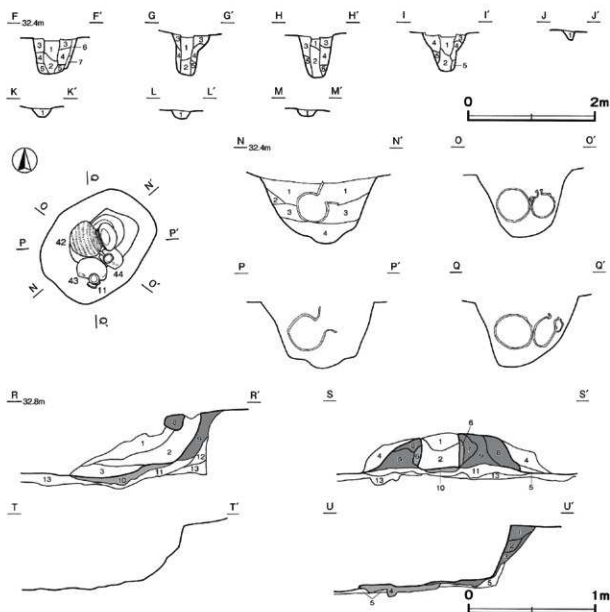
- | | |
|----------|--------------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 褐 色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 5 にふい黄褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化材少量 |

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 6 黒 褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・黒色土ブロック・焼土ブロック少量 |
| 7 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子少量、黒色土ブロック・炭化粒子微量 |
| 8 にふい黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 9 にふい黄褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量(貼床構築土) |



第6图 第2号竖穴建物迹实测图(1)

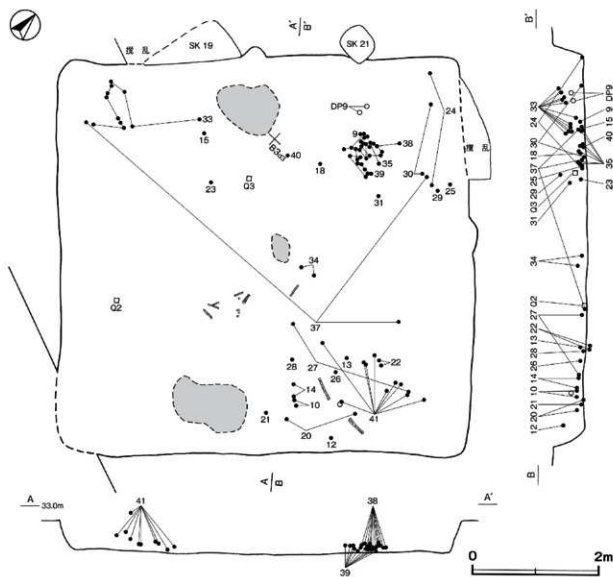
遺物出土状況 土師器片 2641 点 (坏 553, 碗 8, 埴 2, 甕類 2063, 瓶 11, ミニチュア土器 2, 手握土器 2), 須恵器 3 点 (広口壺 1, 提瓶 2), 土製品 28 点 (勾玉 1, 土玉 13, 囊玉 6, 支脚 8), 石器 2 点 (砥石), 石製品 20 点 (白玉 19, 紡錘車 1), 不明石材 3 点のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 石器 1 点 (鏃), 鉄滓 1 点 (7.05 g) が, 中央部から南部域を除いた全域や貯蔵穴から出土している。覆土との関係については, 上層とした第 4・5 層上面から出土している 1 群, 中層とした第 5~7 層にかけて出土している 2 群, 下層とした第 7 層下層から 8・9 層上層で出土している 3 群に分けることができる。1 群については, 部分的に煤が付着している甕類の出土が多く, 破片が比較的大型で, ある程度の接合関係が認められるものの完形品が少ないことから, 投棄と思われる。2 群については, 二次焼成を受けている坏・碗類の出土が多く, 18 の坏のように完形品も認められるが, 1 群と同様な接合関係で完形品になるものが少ないことから, 投棄と思われる。3 群の出土数は少



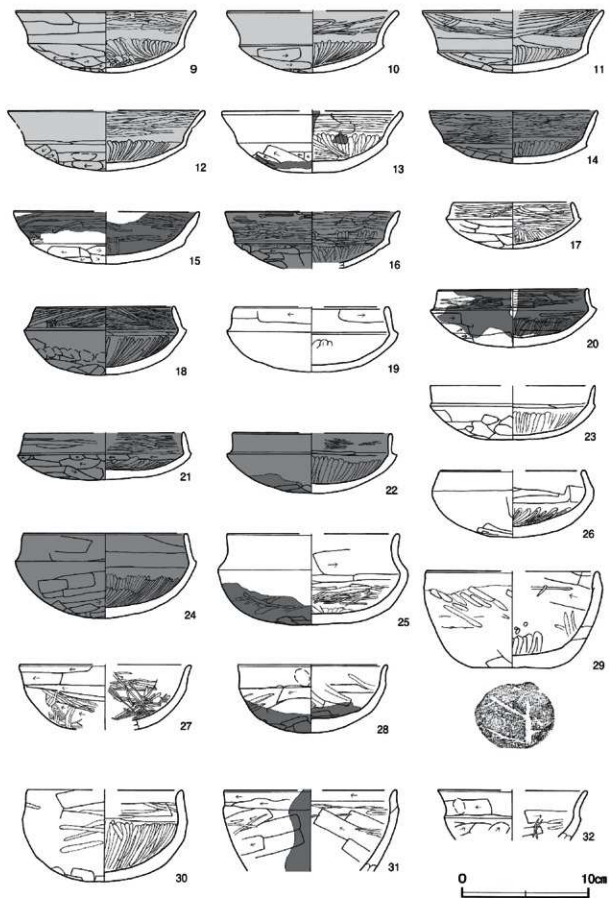
第7図 第2号竪穴建物跡実測図(2)

ないが、36の甕は遺棄されたと考えられる。17の坏は出入り口施設付近から逆位で出土し、底部に弱い火熱を受けており、45のミニチュア土器は部分的に煤が付着している。中層が埋め戻された際に、埋土が底部上に薄く堆積したり、部分的に覆われたためと考えられ、遺棄されている。また玉類は全城から出土しているものの、出入り口施設付近に多く、弱い二次焼成を受けていることから、17の坏や45のミニチュア土器と共に遺棄された可能性もある。

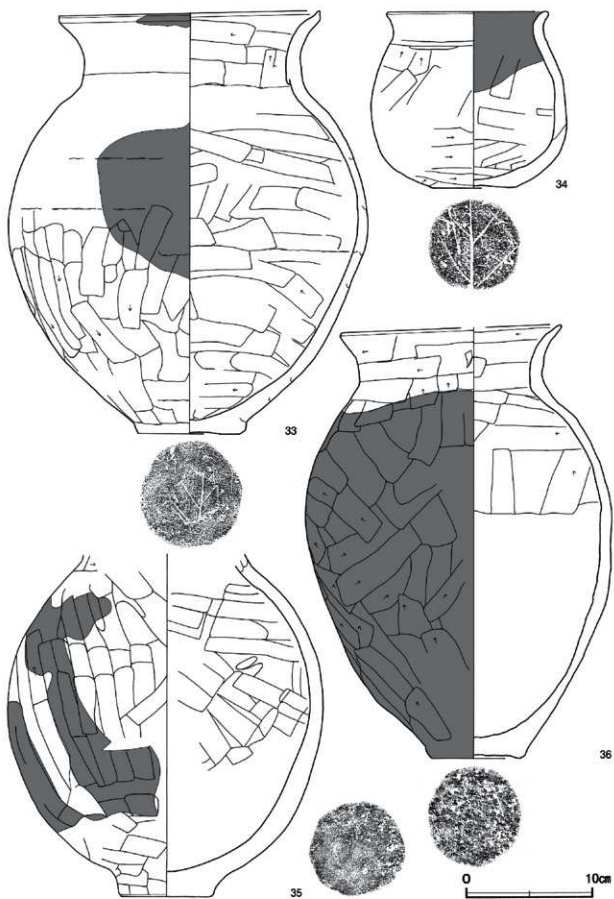
所見 竈の第4層の袖部の崩壊土や覆土第8層の流入土から、上層解体後に若干の時間が経過してから埋め戻されたと考えられる。3群の遺物が遺棄され、中層で埋め戻されている。焼土ブロックや炭化材が含まれていることから、1・2群の出土遺物は中層の形成段階で二次焼成を受けたと考えられ、その後、上層で埋め戻されている。1群と2群の出土位置は、投棄される過程が異なっているものと思われる。時期は、出土土器から6世紀中葉に比定できるが、6世紀中葉以前の様相をもつ土器も含まれている。



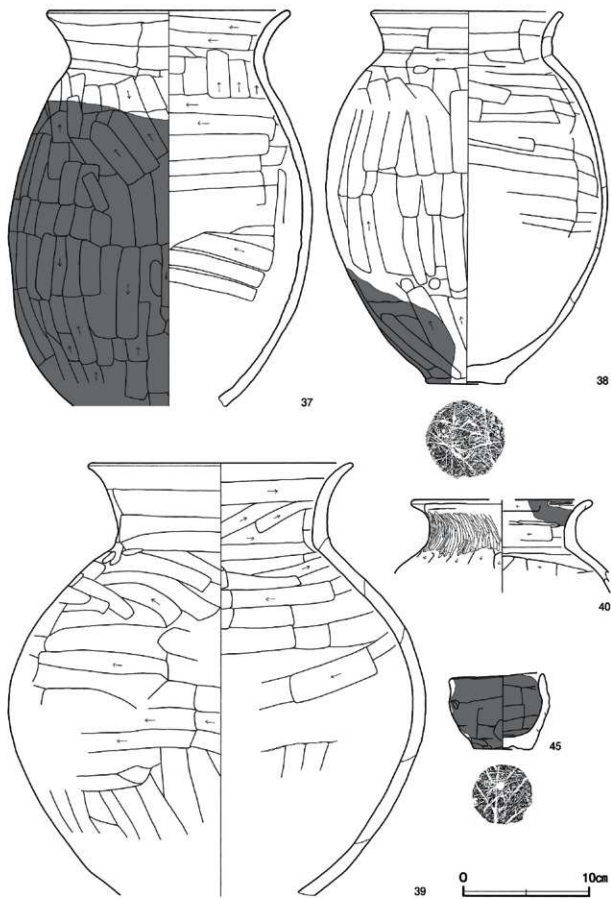
第8図 第2号竈穴建物跡実測図(3)



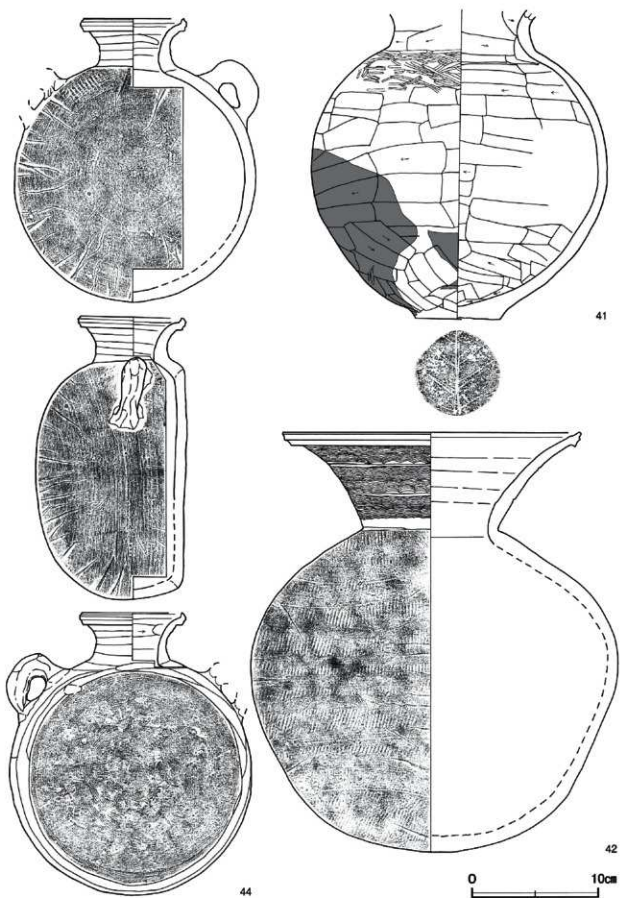
第9图 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図1)



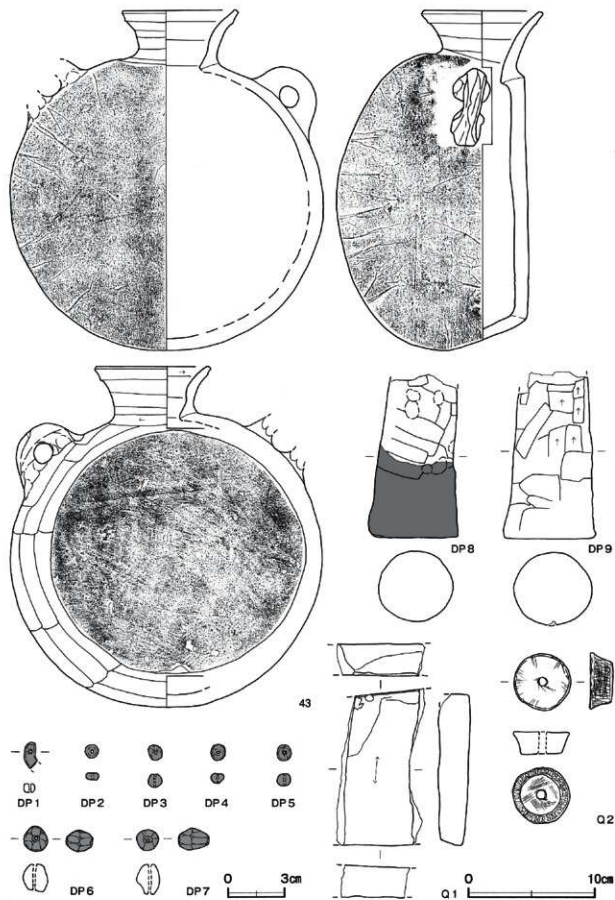
第10图 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第 11 图 第 2 号竖穴建物跡出土遺物実測図(3)



第12图 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図(4)



第13图 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図(5)



第14図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(6)

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第9～14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土師器	坏	14.2	5.0	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	80% Pl. 6 一次焼成
10	土師器	坏 [134]	5.0	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	70% Pl. 6 一次焼成
11	土師器	坏 [142]	5.0	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	貯藏穴	50% Pl. 6 一次焼成
12	土師器	坏 [156]	4.8	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	60% Pl. 6 一次焼成
13	土師器	坏 [142]	4.9	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	40% 一次焼成
14	土師器	坏 [133]	4.2	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	95% Pl. 6 9% 内面放射状 一次焼成
15	土師器	坏 [146]	4.3	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	明褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	70% 一次焼成
16	土師器	坏 [138] (45)	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	貯藏穴	30% 9% 内面放射状 一次焼成
17	土師器	坏 95	3.7	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	覆土下層	100% Pl. 6 一次焼成
18	土師器	坏 108	5.4	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	暗灰褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き 「X」の痕跡あり	覆土中層	100% Pl. 6 一次焼成
19	土師器	坏 [120]	5.2	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 底部外面劣化のため 調整不明 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	80% 一次焼成
20	土師器	坏 120	4.6	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	98% Pl. 6 9% 内面放射状 一次焼成
21	土師器	坏 [126]	3.8	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	明赤褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	80% 9% 内面放射状 一次焼成
22	土師器	坏 [124]	4.9	-	-	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部 外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	80% 9% 内面放射状 一次焼成
23	土師器	坏 [131]	4.4	-	-	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面劣化のため調整不明 底部外面 ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	70% 一次焼成
24	土師器	坏 129	6.8	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 底部外面ヘラナデ後 磨き 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	98% Pl. 6 9% 内面放射状 一次焼成
25	土師器	坏 [135]	7.3	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 底部外面ヘラナデ後 磨き 内面ヘラナデ後磨き・放射状磨き	覆土中層	80% Pl. 7 一次焼成
26	土師器	坏 [112]	5.3	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 底部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	70% Pl. 6 一次焼成
27	土師器	坏 [135] (52)	-	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底 部外面ヘラナデ後磨き 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	30% 一次焼成
28	土師器	坏 118	5.4	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 底部外面ヘラナデ後 磨き 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	70% Pl. 7 40% 内面放射状 一次焼成
29	土師器	碗 [134]	7.8	6.3	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	普通	口縁・体部外・内面ヘラナデ 体部外面下磨 ヘラナデ 底部ヘラナデ後木杵磨	覆土上層	70% Pl. 7 一次焼成
30	土師器	碗 [121]	7.3	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	普通	口縁・体部外・内面ヘラナデ 底部内面ヘラナデ後 放射状磨き	覆土中層	70% Pl. 7 一次焼成
31	土師器	碗 [136]	(65)	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外・内面ヘラナ デ後磨き	覆土上層	30% 一次焼成
32	土師器	碗 [118]	(40)	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 口縁部・内面ヘラナ デ調整不明	覆土上層	20% 一次焼成
33	土師器	甕 205	33.8	8.3	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 内 面ヘラナデ調整不明	覆土上層	90% Pl. 8 一次焼成
34	土師器	小形甕 126	14.1	6.9	-	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底 部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	覆土上層	80% Pl. 7 一次焼成
35	土師器	甕 - (272)	7.3	-	-	長石・石英・雲母・ 繊維	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底 部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	覆土上層	80% Pl. 8 一次焼成
36	土師器	甕 [174]	34.6	7.1	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底 部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き	床面	90% Pl. 8 20% 調整不明 一次焼成
37	土師器	甕 191 (315)	-	-	-	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナ デ後磨き 内面ヘラナデ	覆土中層	70% 調整不明 一次焼成
38	土師器	甕 147	29.9	6.1	-	長石・石英・雲母・ 繊維	橙	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナ デ後磨き 内面ヘラナデ 底部木杵磨	覆土上層	70% Pl. 8 一次焼成
39	土師器	甕 207 (344)	-	-	-	長石・石英・ 赤色粒子・繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナ デ後磨き 内面ヘラナデ	覆土上層	70% 一次焼成
40	土師器	小形甕 [140]	(74)	-	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナ デ後磨き 内面ヘラナデ	覆土中層	70% 一次焼成
41	土師器	甕 - (247)	6.7	-	-	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナ デ後磨き 内面ヘラナデ 底部木杵磨	覆土上層	60% Pl. 8 一次焼成
42	煎豆器	広口甕 238	33.5	-	-	長石・石英・ 白色粒子・繊維	灰	良好	口縁部外面磨き 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明	貯藏穴	100% Pl. 9 一次焼成
43	煎豆器	提瓶 8.6	27.3	-	-	長石・石英・ 白色粒子・繊維	黄灰色	良好	内面調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明	貯藏穴	95% Pl. 9 一次焼成
44	煎豆器	提瓶 8.0	22.6	-	-	長石・石英・ 白色粒子・繊維	灰	良好	内面調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明 調整不明	貯藏穴	95% Pl. 9 一次焼成

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
45	土師器	にねナテ土器	7.3	6.1	4.4	長石・石英・雲母・針状物質	黒褐色	普通	外・内面ヘラナテ 上縁部外縁下縁にヘラ側面による比翼 底部木葉文・筋き	覆土下層	80% PL10 二次焼成
番号	器 種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備 考
DP 1	与玉	(1.3)	0.6	0.1	(0.86)	長石・石英・針状物質	黒褐色	ナテ	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
DP 2	小玉	0.7	0.4	0.1	0.29	長石・石英・針状物質	黒褐色	ナテ	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
DP 3	小玉	0.8	0.7	0.1	0.37	長石・石英・針状物質	黒褐色	ナテ	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
DP 4	小玉	0.8	0.5	0.1	0.31	長石・石英・針状物質	褐色	ナテ	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
DP 5	小玉	0.9	0.7	0.1	0.35	長石・石英・針状物質	褐色	ナテ	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
DP 6	薬玉	1.3	1.4	0.1	1.65	長石・石英・針状物質	黒褐色	ナテ	両方向からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
DP 7	薬玉	1.2	1.2	0.1	2.33	長石・石英・針状物質	黒褐色	ナテ	両方向からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
番号	器 種	高さ	最大径	最小径	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備 考
DP 8	支脚	(13.0)	7.1	(5.5)	(631.0)	長石・石英	にぶい橙	粘土巻き上げ	ヘラナテ 指摺痕	床面	PL10 保存着
DP 9	支脚	(13.3)	7.3	(5.6)	(665.0)	長石・石英・雲母	橙	粘土巻き上げ	ヘラナテ	覆土下層	
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴		出土位置	備 考	
Q 1	紙石	125	(7.0)	2.6	(309.7)	砂岩	紙面1面		覆土中層	PL10 二次焼成	
番号	器 種	長さ	厚さ	孔径	重量	材 質	特 徴		出土位置	備 考	
Q 2	紡錘車	4.6	1.8	0.6	51.36	蛇紋岩	上面・下面研磨	側面削り後研磨	二方向からの穿孔	床面	PL10
Q 3	白玉	0.8	0.5	0.1	0.55	滑石	両面平滑	側面削り後研磨	一方からの穿孔 穿孔痕	覆土下層	PL10 二次焼成
Q 4	白玉	0.9	0.6	0.2	0.81	滑石	両面平滑	側面削り後研磨	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
Q 5	白玉	0.8	0.4	0.3	0.38	滑石	片面平滑	片面未調整 側面削り後研磨	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
Q 6	白玉	0.8	0.6	0.2	0.59	滑石	片面平滑	片面未調整 側面削り後研磨	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成
Q 7	白玉	0.8	0.4	0.2	0.35	滑石	両面平滑	側面削り後研磨	一方からの穿孔	覆土下層	PL10 二次焼成

第3号竪穴建物跡 (第15図)

位置 調査区中央部のB3d6区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 北部及び西部が調査区外へ延びているため、北東・南西軸は4.73m、北西・南東軸は3.30mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向は不明である。壁高は42～46cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部および出入り口部が踏み固められている。貼床は、第9層を埋土して構築している。壁下には壁溝が巡っている。堤状施設が2か所で確認できた。堤1は北部が調査区外へ延びているため、長さ187cm、幅43～56cmしか確認できなかった。P2周辺を弧状に巡り、床面からの高さは10cmほどで、断面形は台形状である。P2周辺の区画と考えられる。堤2は西部が調査区外へ延びているため、上幅は54～58cm、下幅は154～164cmしか確認できなかった。P3とP4の間に存在し、上部は長方形を呈し、下部は半楕円形と推定できる。高さは18cmほどで、断面形は不均等な台形状である。性格は不明である。堤1は、床面から盛土されており、堤2は貼床構築土と同一層で構築されている。

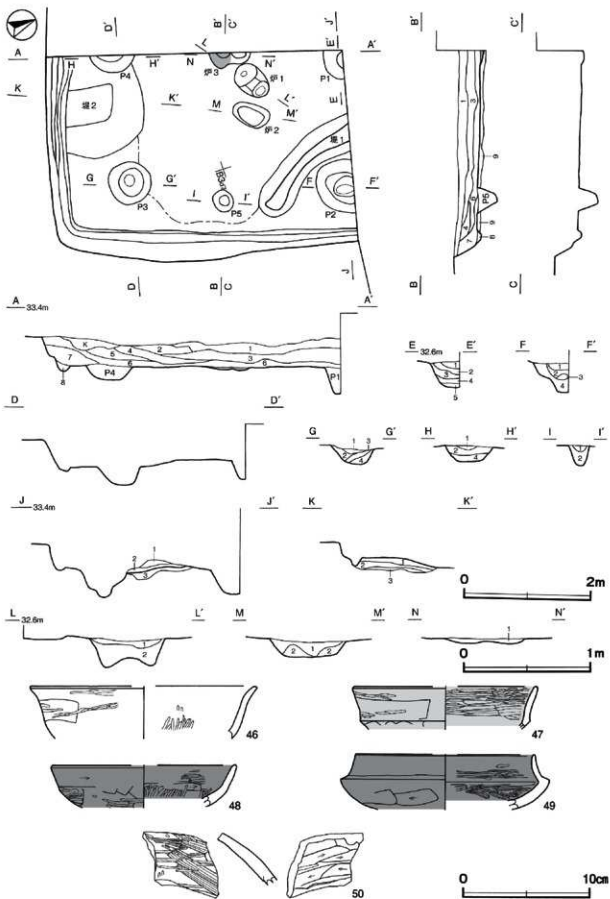
堤1土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
- 2 黄 褐 色 ロームブロック多量、黒色土ブロック微量
- 3 明黄褐色 ロームブロック多量 (貼床構築土)

堤2土層解説

- 1 明黄褐色 ロームブロック多量 (貼床構築土)
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 3 黄 褐 色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量

炉 3か所。本跡の全貌が明確でないことから、建物内のどの位置に当たるかは不明である。炉1は長さ59cm、



第 15 图 第 3 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

幅 41cm で楕円形を呈している。深さは 22cm で掘りくぼめられ、底面では凹凸が確認できた。炉 2 は長さ 59cm、幅 36cm で楕円形を呈している。深さは 12cm で、皿状に掘りくぼめられている。炉 1・2 は、焼土ブロックやロームブロックを含んだ覆土で埋め戻され、床面まで踏み固められている。明確な炉床面は確認できなかったが、形状から地床炉である。炉 3 は、長さ 64cm、幅 23cm で楕円形と推定できる。深さは 4cm で、皿状に掘りくぼめられ、底面には火熱を受けて赤色硬化した炉床が確認できた。地床炉と判断できる。

炉 1・2 土層解説

- 1 褐 灰 色 焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 2 褐 灰 色 ロームブロック・焼土ブロック少量

炉 3 土層解説

- 1 赤 褐 色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ15～45cmと浅く、配置からすれば柱穴と考えられるが、堅穴建物の全貌が不明であることから、主柱穴と考えられるP3以外は、主柱穴や補助柱穴の判断はできない。さらに堤状施設に囲まれているP2については、貯蔵穴とも考えられる。いずれも酷似した土質の覆土で埋め戻されている。P5は深さ32cmで、周辺が踏み固められていることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。ロームブロックや黒色土ブロックが含まれることから、柱材を抜き取った後、埋め戻されている。

ピット土層解説 (P1～P4共通)

- 1 褐 灰 色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 2 褐 色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
- 3 明黄褐色 ロームブロック少量

- 4 にふい青褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック微量
- 5 褐 色 ロームブロック少量、黒色土ブロック微量

ピット土層解説 (P5)

- 1 褐 灰 色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 2 褐 色 ローム粒子中量、黒色土ブロック少量

覆土 8層に分層できる。第1～4層は黒色土が主体で、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第5層は、ロームブロックが含まれ、第6層はロームブロックと焼土ブロックや炭化物が含まれていることから、段階的に埋め戻されている。第7層は流入土、第8層は壁溝の覆土、第9層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 褐 灰 色 ローム粒子少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 4 褐 灰 色 ローム粒子微量
- 5 灰黄褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量

- 6 黒 褐 色 ロームブロック少量、黒色土ブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 7 にふい青褐色 ローム粒子少量
- 8 褐 色 ローム粒子少量
- 9 明黄褐色 ロームブロック多量 (貼床構築土)

遺物出土状況 土師器片 125点 (坏 37, 高坏 2, 甕類 84, 瓶 2) のほか、鉄滓 2点 (4.46g) が出土している。鉄滓が本跡に伴うかは不明である。遺物は小片で全域に散在し、二次焼成された遺物が中層とした第6層付近で出土している。接合関係が乏しいことから、破碎された後に投棄されたものと考えられる。

所見 出土土器が細片であることから、明確な時期決定は困難であるが、外・内面が赤彩や黒色処理された坏がみられることから、時期は6世紀中葉に推定できる。

第3号堅穴建物跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
46	土師器	坏	[178]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後磨き 内面ナデ 底部外面ヘラナデ後磨き 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	5% 二次焼成
47	土師器	坏	[144]	(3.4)	-	長石・石英・雲母・燧石	にふい青	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
48	土師器	坏	[145]	(3.3)	-	長石・石英・雲母・針状物質	灰	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ後磨き 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	10% 二次焼成
49	土師器	坏	[142]	(4.4)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にふい青	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナデ後放射状磨き 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
50	土師器	甕	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外面4条1単位ハケ目後磨き 内面ヘラナデ	覆土中	5%

第4号竪穴建物跡 (第16・17図)

位置 調査区中央部のB36区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 南西コーナー部が調査区外へ延びているが、長軸は4.81mで、短軸は4.80mの方形で、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は37～42cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第10層を埋土して構築している。確認できた壁下には、壁溝が巡っている。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは109cm、燃焼部幅は28cmである。袖部は、床面を掘り込んで、締まりが強い第8層を基部とし、砂質状の粘土や焼土を含む第5～7層を積み上げて構築している。火床部は床面から9cmほど下がっており、火熱を受けて赤変硬化した火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に25cmほど掘り込まれ、火床部から外傾している。煙道部には袖部と同質の粘土が貼り付けられ、その層下には床面を埋め戻したと思われる第8層が堆積している。煙道口部は残存しているものの、第1・2層の燃焼部の天井や天井部内壁は崩落している。第3・4層は煙道からの流入土であることから、自然崩落している。

竈土層解説

1 濃い黄褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック少量(天井部材崩落土)	7 濃い黄褐色	ロームブロック少量、ロームブロック少量、焼土ブロック少量(袖部構築土)
2 暗赤褐色	焼土ブロック多量(天井部内壁崩落土)		
3 灰黄褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量(流入土)	8 褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック・炭化物・焼土粒子微量(袖部基部)
4 濃い黄褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量(流入土)	9 黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量(貼床構築土)
5 赤褐色	粘土ブロック・焼土ブロック中量(袖部内壁)		
6 灰黄褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、ローム		

ピット 5か所。P1～P4は深さ26～47cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1～P5の覆土はロームブロックを含み、締まりが弱いことから、柱材を抜き取った後、埋め戻されている。

ピット土層解説 (P1～P5共通)

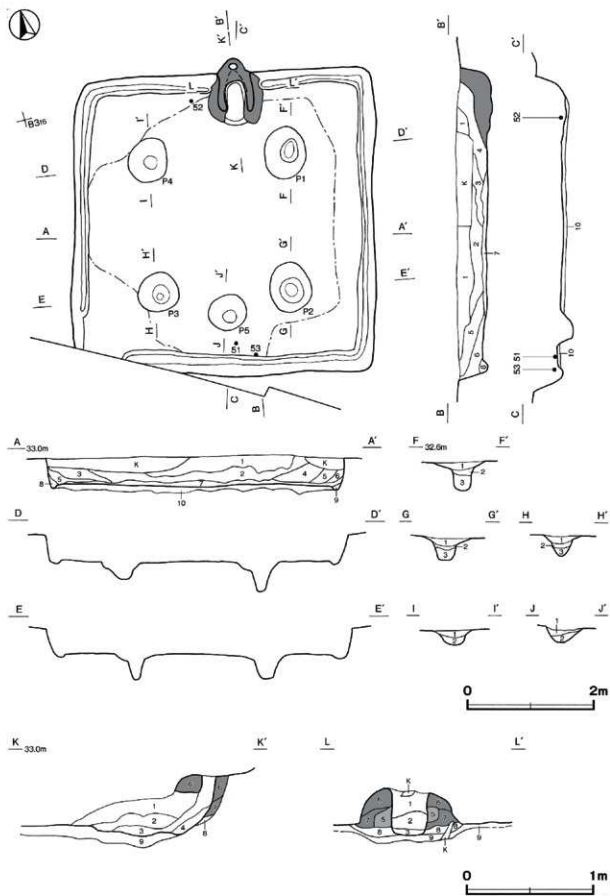
1 褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	3 明黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
2 黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量		

覆土 9層に分層できる。第1～8層は、ロームブロックが含まれ、不自然な堆積から埋め戻されている。第1層と第5層、第3層と第6層は、含有物が若干異なるものの、土質が類似していることから、時間差が殆どなく埋め戻されている。第9層は壁溝の覆土、第10層は貼床の構築土である。

土層解説

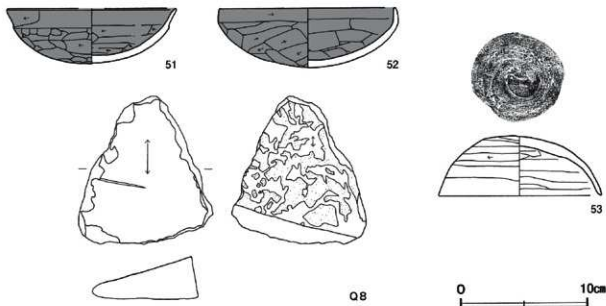
1 黒褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	7 褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック・炭化粒子少量
2 褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量		
3 濃い黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量	8 濃い黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量
4 褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量	9 濃い黄褐色	ローム粒子中量、黒色土ブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	10 黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量(貼床構築土)
6 濃い黄褐色	ロームブロック中量、炭化物微量		

遺物出土状況 土師器片734点(坏76、甕類656、瓶2)、須恵器片1点(坏)のほか、土師質土器片1点(内耳鍋)、瓦質土器片2点(鉢)、陶器片1点(壺)、土製品1点(支脚片)、石器1点(砥石片)、鉄洋1点(0.86g)、瓦2点が出土している。第1～2層からの出土遺物は、小片で全域に散在しており、また攪乱もあることから、投棄と混入が混在している。51の坏や53の坏蓋は、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。竈付近では52の坏のみが完形品であることや床面に近い位置での出土であることから、遺棄の可能性が高い。



第 16 图 第 4 号竖穴建物跡实测图

所見 投棄された遺物と遺棄された遺物の時期差は認められないことから、時期は7世紀初頭に比定できる。



第17図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
51	土師器	坏	113.4	4.4	-	長石・石英・針状物質	橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ ヘラナデ 内面ヘラナデ 底部外面ヘラ削り後	覆土下層	60% 外・内面塗盛り
52	土師器	坏	139	4.8	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ ヘラナデ 内面ヘラナデ 底部外面ヘラ削り後	覆土下層	100% PL 6 外・内面塗盛り
53	須恵器	杯蓋	130	4.8	-	長石・石英・針状物質	灰白	普通	丸井部回転ヘラ切り	覆土下層	80% PL 9 輪山塗

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	砥石	(11.8)	(10.7)	3.4	(431.2)	砂岩	砥面1面	覆土上層	PL10

第5号竪穴建物跡 (第18～20図)

位置 調査区東部のB3e9区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第23・24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東部の大部分が調査区外へ延びているため、北西・南東軸は5.52mで、北東・南西軸は5.40mしか確認できなかった。ほぼ方形と推定でき、主軸方向はN-40°-Wである。壁高は45～59cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦な貼床であるが、南東壁下の縁辺は4cmほど高くなっており、中央部及びP4・P5周辺が踏み固められている。貼床は、第11層を埋土して構築している。壁下には壁溝が巡っており、北西壁下の北部には内部に向かって延びる溝が確認できた。調査区外へ延びているため、長さ52cm、幅20cmしか確認できなかった。深さは12cmで、断面形はU字状である。間仕切りの可能性がある。また、P1及び貯蔵穴1の南西部には、堤状施設が確認できた。北部が調査区外へ延びるため、長さ156cm、幅36～110cmしか確認できなかった。P1及び貯蔵穴1周辺を弧状に巡り、床面からの高さは8cmほどで、断面形は台形状である。ロームブロックを多く含む構築土によって、床面上に盛土されており、貯蔵穴1周辺の区画と考えられる。

堤状施設土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------|-------|----------------------------|
| 1 黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | 3 黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量（貼床構築土） |
| 2 にふい黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | | |

炉 やや北東寄りで確認できた。調査区外へ延びているため、長さ72cm、幅22cmしか確認できなかったが、楕円形を呈する地床炉と推定できる。深さは3cmで、床面から皿状に掘りくぼめられている。底面は若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦で、火熱を受けて赤色硬化した炉床が一部残存していた。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|----------------------------|
| 1 黄褐色 | 焼土ブロック少量 | 3 黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量（貼床構築土） |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量（炉床） | | |

竈 北西壁のほぼ中央に付設されている。煙道部の一部と火床部しか確認できなかったため、火床部から煙道部までは113cm、火床部幅は40cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受け赤変硬化している火床面が残存している。煙道部は壁外に15cmほど掘り込まれ、北西壁中段から外傾している。煙道部及び火床部にはロームブロックを含んだ粘土が確認でき、閉塞時に貼り付けられた可能性がある。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|----------------------------|
| 1 黄褐色 | ロームブロック多量、粘土ブロック少量 | 3 黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量（貼床構築土） |
| 2 赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量（火床） | | |

ピット 5か所。P1～P3は深さ69～86cmで、配置からすれば主柱穴と考えられるが、堤状施設に囲まれているP1は、貯蔵穴の可能性もある。P1は埋め戻されており、P2・P3は平・断面形状から、柱材周辺を掘り込んで抜き取られていると思われる。第1層は焼土粒子が含まれることから、建物本体の覆土第7層からの流入と思われる。第2・3層は埋土、第4層は抜き取り後の埋め戻し土、第5層は締まりが弱いことから、柱材の抜き取り時に、掘方への埋土が押さえつけられ崩壊した層位、第6～8層は掘方への埋土と考えられる。P4・P5は深さ8・10cmと浅いが、配置や周辺が踏み固められていることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。ロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。

ピット土層解説（P1～P3共通）

- | | | | |
|-------|---------------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | 6 にふい黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック微量 | 7 黄褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | 8 黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量 |

ピット土層解説（P4）

- | | |
|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 |
|-------|-------------------|

ピット土層解説（P5）

- | | |
|----------|-------------------|
| 1 にふい黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 |
|----------|-------------------|

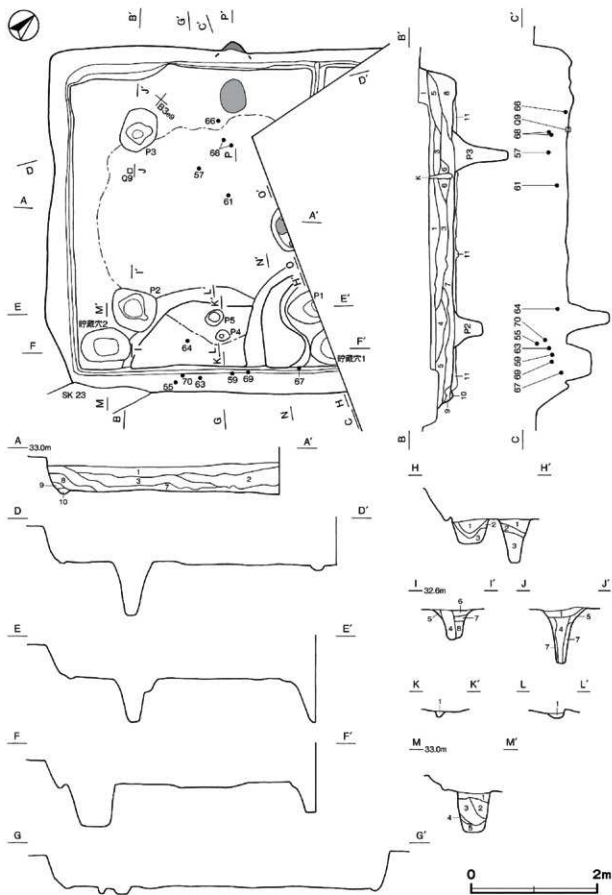
貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は、調査区外へ延びているため、北西・南東軸は60cmで、北東・南西軸は31cmしか確認できなかった。深さ40cmで、壁はほぼ直立している。第1層は、焼土粒子が含まれていることから、覆土第7・8層からの流入と思われる。第2・3層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。貯蔵穴2は、長軸80cm、短軸52cmの隅丸長方形である。深さ64cmで、壁は直立している。第2～5層はロームブロックが含まれた不規則な堆積から、埋め戻されている。双方の新旧関係は、出土遺物がなため不明であるが、覆土の土質が類似していることから、廃絶は同時期と思われる。

貯蔵穴1土層解説

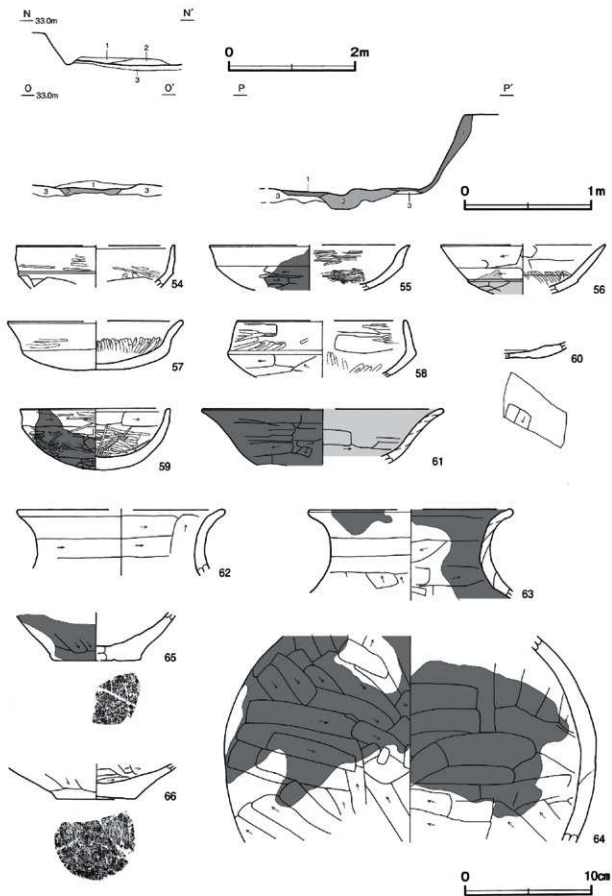
- | | | | |
|-------|---------------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 3 にふい黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | | |

貯蔵穴2土層解説

- | | | | |
|----------|----------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 4 にふい黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 |
| 2 にふい黄褐色 | ロームブロック中量 | 5 にふい黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |



第 18 图 第 5 号竖穴建物跡实测图



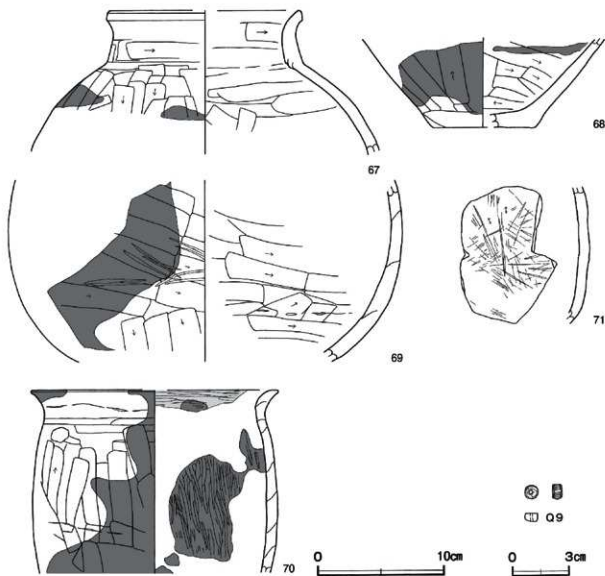
第19图 第5号竖穴建物跡・出土遺物実測図

覆土 10層に分層できる。第1層は黒色土を主体とした自然堆積である。第2～8層は、ロームブロックが含まれていることや不規則な堆積状態から埋め戻しと考えられるが、第5～8層については焼土ブロックや炭化物が含まれていることから、段階的な埋土と考えられる。第9層は壁面の崩落土。第10層は壁溝の覆土である。第11層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 8 褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 黒色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | 10 灰色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 11 黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量（貼床構築土） |
| 6 におい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | | |

遺物出土状況 土器器片913点（坏153、高坏2、甕類741、瓶17）、須恵器片2点（坏）、土製品3点（土玉1、支脚2）、石製品1点（白玉）が、北西壁及び南東壁沿いに散在している。中層とした第5～8層中に多く、二次焼成を受けた大形の破片が比較的多く存在するにも関わらず、接合があまり認められなかったことから、投棄によるものと考えられる。



第20図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図

所見 二次焼成を受けた遺物は、焼土ブロックを含む第5層から下位で出土している。竈については、袖部が確認できなかったことから意図的に壊されており、その後、閉塞の可能性がある。こうした様相は第2号竪穴建物跡に酷似していることから、北東壁への作り替えが推測できる。炉は埋め戻された痕跡が確認できなかったことから、竈と併用していた可能性がある。時期は、出土土器から6世紀中葉に比定できる。

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(第19・20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
54	土師器	坏	125	3.4	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後磨き、内面ヘラナデ、底部外面ヘラナデ後ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
55	土師器	坏	158	3.6	-	長石・石英・雲母・針状物質	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き、底部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
56	土師器	坏	130	3.9	-	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	口縁部外、内面ヘラナデ、底部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
57	土師器	坏	136	3.9	-	長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後磨き、内面ナデ、底部外面劣化のため調整不明、内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	40% 二次焼成
58	土師器	坏	134	4.5	-	長石・石英・針状物質	橙	普通	口縁部外、内面ヘラナデ後磨き、底部外面ヘラナデ後ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
59	土師器	坏	118	4.9	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後磨き、内面ヘラナデ、底部外面ヘラナデ後ヘラナデ後磨き、内面ヘラナデ後磨き、噴放射状放射状磨きと兼	覆土中層	90% PL 7 二次焼成
60	須恵器	坏	-	1.3	-	長石・石英・白色粒子	褐灰	良好	底部手持ちヘラナデ	覆土中層	5% 上毛野焼き
61	土師器	高坏	194	4.4	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外、内面ヘラナデ、坏部外、内面ヘラナデ後ヘラナデ磨き	覆土中層	10% 二次焼成
62	土師器	羹	162	5.2	-	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	口縁部外、内面ヘラナデ	覆土上層	5%
63	土師器	羹	156	7.1	-	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部外、内面ヘラナデ、底部外面ヘラナデ後ヘラナデ	覆土中層	10% 二次焼成
64	土師器	羹	-	16.4	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラナデ後ヘラナデ磨き、内面ヘラナデ	覆土中層	10% 二次焼成
65	土師器	羹	-	3.8	6.6	長石・石英・繊維	褐灰	普通	外面ヘラナデ後ヘラナデ、内面劣化のため調整不明、底笠木重磨	覆土中層	5% 放射状焼成
66	土師器	羹	-	2.8	6.3	長石・石英・雲母・繊維	褐灰	普通	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ後外縁部ヘラナデ	覆土中層	10% 放射状焼成
67	土師器	羹	150	11.5	-	長石・石英・雲母・針状物質	明赤褐	普通	口縁部外、内面ヘラナデ、体部外面ヘラナデ後ヘラナデ、内面ヘラナデ	覆土中層	25% 二次焼成
68	土師器	羹	-	7.0	8.2	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	体部外面ヘラナデ後ヘラナデ、内面ヘラナデ	覆土中層	10% 放射状焼成
69	土師器	羹	-	14.5	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	体部外面ヘラナデ後磨き、内面ヘラナデ	覆土中層	5% 二次焼成
70	土師器	瓶	196	14.7	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き、体部外面ヘラナデ後ヘラナデ、内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
71	土師器	磁石配	-	11.0	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ後磨き、内面ヘラナデ、瓶蓋1面磨み目多数	覆土中層	5% 焼成部転用器二次焼成

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	白玉	0.7	0.5	0.1	0.24	滑石	片面平滑 片面未調整 側面削り後研磨 一方からの穿孔	覆土中層	PL10 二次焼成

第6号竪穴建物跡(第21・22図)

位置 調査区東部のB4区1区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第3・34号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東半部が調査区域外へ延びているため、北西・南東軸は6.15m、北東・南西軸は4.02mしか確認できなかった。方形で、主軸方向はN-35°-Wと推定される。壁高は26~46cmで、ほぼ直立している。

床 はほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁下の壁溝は確認できなかった。

ピット 5か所。P1~P4は深さ56~68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P1とP3、P2とP4は重複しており、P3からP1、P4からP2へ建て替えと考えられる。ロームブロックが含まれることから、柱材を抜き取った後、埋め戻されている。第3層は締まりが弱いことから、抜き取り時に、第4層が押さえつけられ崩壊した層位、第4~6層は掘方への埋土と考えられる。P1・P3の土層断面にみられる第5・6層はP3の掘方への埋土の残存と思われる。P5は深さ23cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。ロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。

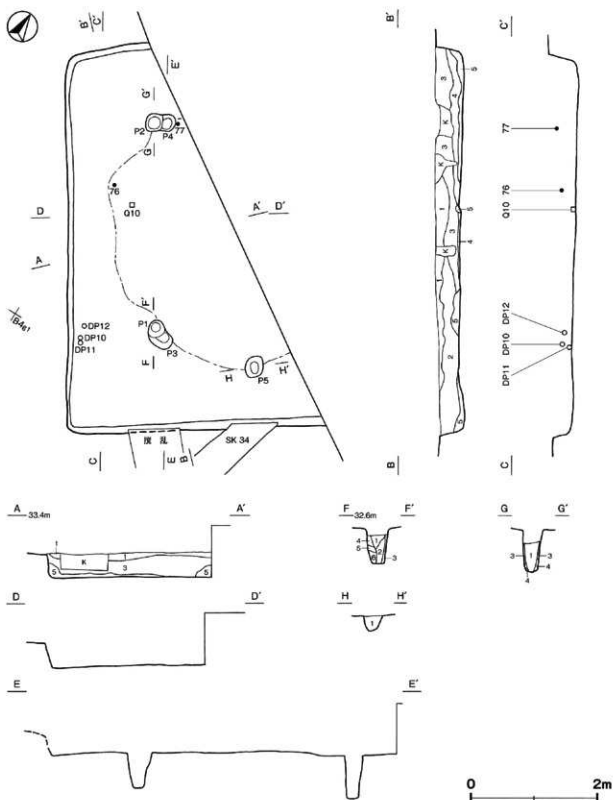
ビット土層解説 (P1~P4共通)

- 1 褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 2 じい・黄褐色 ロームブロック少量、黒色土ブロック微量
- 3 褐色 黒色土ブロック中量、ロームブロック微量

- 4 黄褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック微量
- 5 褐色 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量

ビット土層解説 (P5)

- 1 じい・黄褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量



第21図 第6号竪穴建物跡実測図

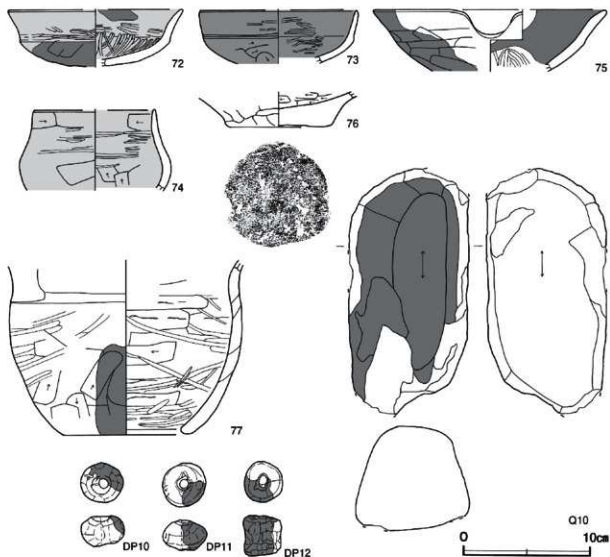
覆土 5層に分層できる。第1層は黒色土を主体とした自然堆積である。第2～5層は、ロームブロックが含まれていることや不規則な堆積状態から埋め戻しと考えられるが、第4・5層については焼土ブロックが含まれていることから、段階的な埋土と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------|----------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量 | 4 黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 2 に白い黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | 5 に白い黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 に白い黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片255点(坏54, 高坏1, 甕類198, 瓶2), 須恵器片3点(甕類), 土製品4点(土玉), 石器1点(砥石)が、全域に散在した状態で出土している。第2～4層中からの出土が多く、完成品が認められなかったことから、投棄によるものと考えられる。75の高坏は破断面に煤が付着していることから、破砕してから投棄され、中層とした第4・5層の形成段階で火熱を受けたと考えられる。南西壁沿いの第5層中からは薄く煤が付着したDP10・11の他、土玉2点がまとまって出土し、上部と下部で被熱部分が分かれている。Q10の砥石は床面から出土していることから、遺棄されたと考えられる。

所見 遺棄された土玉や砥石は、第4・5層が埋め戻されたことによって、埋没部分の状態が異なり、被熱



第22図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

を受ける状況が異なっただと考えられる。その後、本跡で焼却し、さらに第2・3層で埋め戻したと考えられる。時期は、出土遺物から6世紀中葉に比定できる。

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
72	土師器	坏	[138]	(4.5)	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい 黄緑	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラ ナデ後ヘラナデ 内面ヘラナデ後 放射状磨き	覆土中層	30% 二次焼成
73	土師器	坏	[125]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい 黄緑	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラ ナデ内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 外・内面磨き 二次焼成
74	土師器	鉢	[95]	(6.4)	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	黄	普通	外・内面ヘラナデ後磨き	覆土上層	10%
75	土師器	高坏	[182]	(4.9)	-	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい 橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 内面ヘラナデ後磨き 外部ヘラナデ後磨き	覆土中層	10% 二次焼成
76	土師器	羹	-	(2.8)	8.5	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい 黄	普通	外部ヘラナデ 内面ヘラナデ 底部ヘラナデ後 放射状磨き	覆土上層	10% 磨き 二次焼成
77	土師器	瓶	-	(13.8)	[100]	長石・石英・雲母・ 針状物質	明赤 赤黒	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 後磨き 外部外面下流ヘラナデ後磨き	覆土中層	20% 二次焼成

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP10	土玉	3.4	2.4	0.7	34.41	長石・石英・雲母・ 針状物質	黄灰	ナデ 指頭痕 二方向からの穿孔	覆土中層下位	PI.10 埋付着
DP11	土玉	3.8	2.4	0.6	29.26	長石・石英・雲母・ 針状物質	黄	ナデ 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土中層下位	PI.10 埋付着
DP12	土玉	3.2	3.2	0.6	39.54	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい 赤黒	ナデ 二方向からの穿孔	覆土中層下位	PI.10 埋付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 10	砥石	(19.5)	9.5	8.7	(2900)	花崗岩	砥面2面	床面	PI.10 埋付着

第7号竪穴建物跡(第23～25図)

位置 調査区東部のB4h3区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 北コーナー部付近が調査区外へ延びているが、長軸は6.32m、短軸は6.30mの方形と推定できる。南東壁の中央部がコの字状に張り出している。主軸方向はN-34°-Wである。壁高は35～42cmで、ほぼ直立している。全域に溝状の攪乱を受け、一部は床下まで達している。

床 平坦な貼床で、攪乱部と壁下縁を除いて全面が踏み固められている。P2の北部で溝を確認したが、東側が調査区外へ延びていることから、長さは44cm、幅は26cmしか確認できなかった。深さは9cmで、断面はU字状である。間仕切りと考えられる。

溝土層解説

1 暗褐色 色 黒色土ブロック中葉、ロームブロック少量

竈 北西壁の中央部に付設されていると推定できる。煙道部の煙出し付近に攪乱を受けているため、焚口部から煙道部までは135cmしか確認できなかった。燃焼部幅は46cmである。袖部は、地山を袖状に掘り残している。第11層の貼床をした後、床面から第9層を基部とし、第7・8層を積み上げて構築している。火床部は床面から皿状に若干掘りくぼめている。火熱を受けた第11層上面が亦変硬化し、第10層の火床面を形成している。煙道部の壁外への掘り込み規模は攪乱により不明であるが、火床部から外傾する角度からすれば、余り突出しないものと推定できる。第3～5層は天井部材や内壁崩落及び煙道部からの流入土で、第6層は袖部の崩壊土と考えられることから、竈は自然崩落したものとみられる。

竪土層解説

1	にんい黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量（建物覆土第2層）	6	褐 灰 色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量（袖部材崩壊土）
2	暗 褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック・焼土粒子少量（建物覆土第3層）	7	灰 白 色	粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量（袖部構築土）
3	にんい赤褐色	粘土ブロック多量、黒色土ブロック・焼土ブロック少量（天井部材崩壊土）	8	にんい黄褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量（袖部構築土）
4	赤 褐 色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量（天井部内壁崩壊土）	9	黒 褐 色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量（袖部基土）
5	暗 褐 色	焼土粒子中量、ローム粒子・黒色土粒子少量（流入土）	10	赤 褐 色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量（火床）
			11	にんい黄褐色	ロームブロック多量、黒色土ブロック微量（袖部構築土）

ピット 6か所。P1は調査区域際で確認できたことから規模は不明である。P2～P4は深さ49～70cmで、配置からP1～P4は主柱穴と考えられる。P1は1層までの確認で、P2～P4は3～5層に分層できる。第1層は、焼土粒子が含まれることから覆土第3層からの流入と考えられる。第2～4層はロームブロックが含まれ、締まりが弱い土層であることから柱材を抜き取った後に埋め戻されている。第5層は抜き取り時に破壊された第6層で、第6層は掘方への埋土である。P5・P6は深さ32～42cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1層は覆土からの流入土、第2・3層は柱材を抜き取った後の埋め戻し土と思われる。P4の第2層から二次焼成を受けたDP13の小玉が出土しているが、埋め戻し時の混入と思われる。

ピット土層解説（P1～P4共通）

1	暗 褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	黄 褐 色	ロームブロック中量
2	黒 褐 色	黒色土ブロック中量、ロームブロック少量	5	暗 褐 色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
3	褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	6	黄 褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック中量

ピット土層解説（P5）

1	褐 色	黒色土ブロック中量、ロームブロック少量	3	黄 褐 色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量
2	にんい黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量			

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径83cm、短径74cmの楕円形で、深さは37cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。覆土は4層に分層できる。第1～3層までは、ロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。第4層については、締まりが強く上面が比較的平坦であることから、最終段階では当層の上面が底面であった可能性がある。

貯蔵穴土層解説

1	暗 褐 色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	3	にんい黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量
2	黒 褐 色	黒色土ブロック中量、ロームブロック少量	4	灰 黄 褐色	ロームブロック中量

張り出し施設 南東壁の中央部を壁外へ、長さ158cm、幅132cmの隅丸長方形に掘り込んでいる。深さは53cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立しているが、北西壁は段を有している。覆土は3層に分層でき、土質が粗く、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。出入り口施設下の貯蔵穴と考えられる。

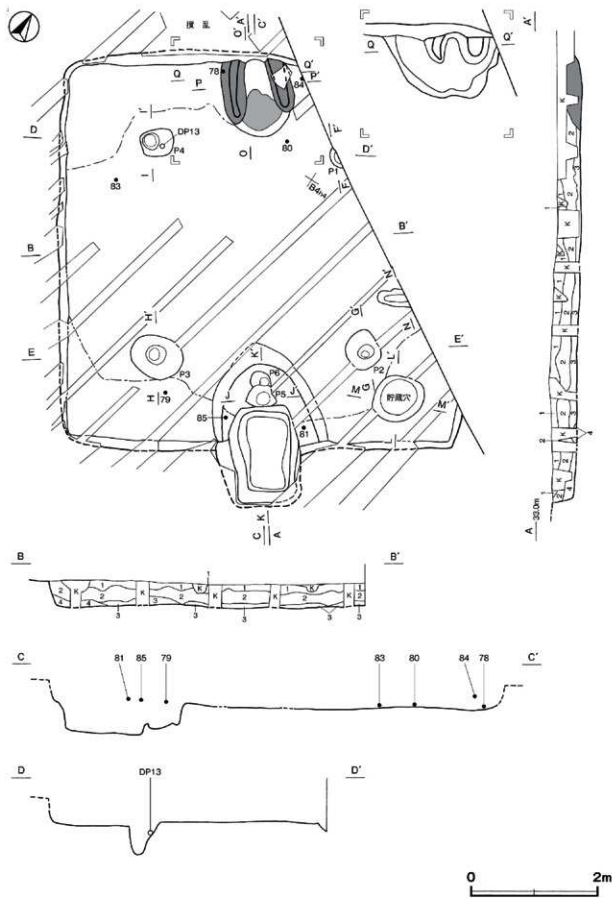
張り出し施設土層解説

1	褐 色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	3	にんい黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
2	黒 褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック中量			

覆土 4層に分層できる。第1層は黒色土を主体とした自然堆積である。第2層はロームブロックが、第3層はロームブロックと焼土粒子が含まれていることから、段階的に埋め戻されている。第4層はローム粒子を含む流入土である。

土層解説

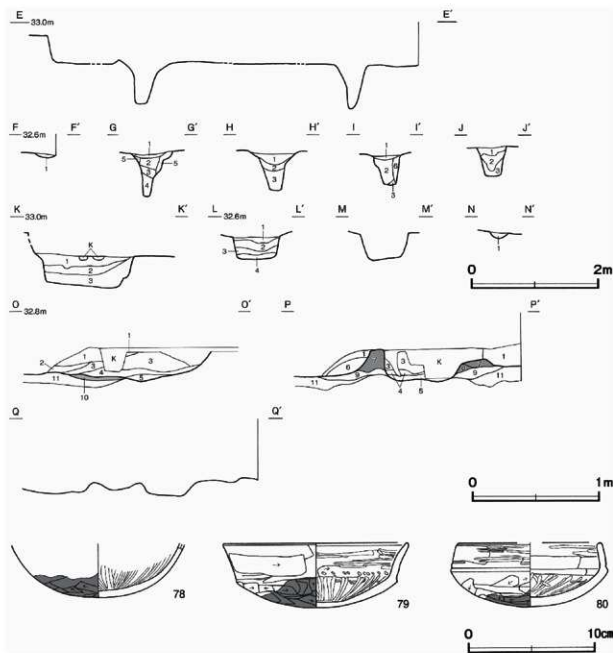
1	黒 褐 色	ローム粒子微量	3	暗 褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック・焼土粒子少量
2	にんい黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量	4	黒 褐 色	ローム粒子少量



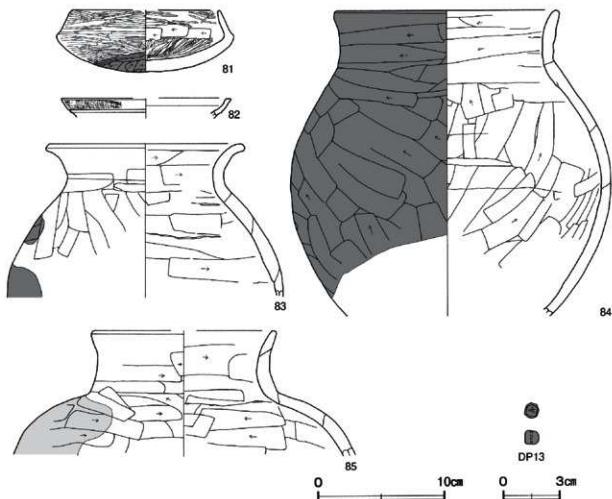
第 23 图 第 7 号竖穴建物跡实测图

遺物出土状況 土師器片 604 点 (坏 143, 碗 1, 甕類 459, 瓶 1), 須恵器片 1 点 (甕), 土製品 15 点 (土玉 1, 支脚片 14) のほか, 縄文土器 1 点 (深鉢), 陶器片 2 点 (碗) が, 竈周辺や張り出し施設周辺にある程度のまとまりがみられるものの, 全域に散在して出土している。完形品の坏も出土しているが, 出土状態は斜位や逆位などと多様であることから, 投棄と思われる。二次焼成を受けた遺物もみられ, 多くは下層とした第 3 層の形成段階で投棄されたと考えられる。

所見 竈の第 6 層の袖部の崩壊土や覆土第 4 層の流入土から, 上屋解体後に若干の時間が経過してから埋め戻されたと考えられる。時期は, 出土土器から 6 世紀中葉に比定できる。



第 24 図 第 7 号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第25図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
78	土師器	坏	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	底部外面へう閉り後へうナデ 内面へうナデ後放射状磨き	覆土下層	10% 二次焼成
79	土師器	坏	14.7	5.2	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面へうナデ 内面へうナデ後磨き 底部外面へう閉り後へう磨き 内面へうナデ後放射状磨き	覆土下層	100% PL 6 二次焼成
80	土師器	坏	[11.1]	5.1	-	長石・石英・雲母・針状物質	明赤褐	普通	口縁部外・内面へうナデ後磨き 底部外面へう閉り後へうナデ 内面へうナデ後放射状磨き	覆土下層	40% 二次焼成
81	土師器	坏	[11.6]	4.9	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	口縁部外・内面へうナデ後磨き 底部外面へう閉り後磨き 内面へうナデ後放射状磨き へう圧痕による屈文状の放射状	覆土下層	70% PL 7 二次焼成
82	須恵器	甗	[13.4]	(1.6)	-	長石・赤色砂子・黒色砂子	にぶい黄橙	良好	外面に施したる区画「3条1単位の流状文」内面ナデ。自然軸付着	覆土下層	5% PL 9 二次焼成
83	土師器	甗	15.2	(12.2)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部外・内面へうナデ 体部外面へう閉り後へうナデ 内面へうナデ	覆土下層	30% 二次焼成
84	土師器	甗	17.4	(24.3)	-	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面へうナデ 体部外面へう閉り後へうナデ 内面へうナデ	覆土中層	70% PL 8 自然軸付着
85	土師器	甗	[10.0]	(9.6)	-	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面へうナデ 体部外面へう閉り後へうナデ 内面へうナデ	覆土下層	30% 二次焼成

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP13	小玉	0.8	0.7	0.1	0.41	長石・石英・針状物質	黒褐	一方からの穿孔	P4	PL10 二次焼成

第8号竪穴建物跡（第26・27図）

位置 調査区東部のC4b5区、標高33mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 南部が調査区外へ延びていることから、北西・南東軸は5.63mで、北東・南西軸は4.68mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-53°-Eである。壁高は32～34cmで、ほぼ直立している。全域に溝状の複乱を受け、床下まで達している。

床 平坦な貼床で、複乱を除いた全面が踏み固められている。竈と北西壁下の中央部を除いて、壁下には壁溝が巡っている。北西壁下からP3へ向かって、溝が延びている。長さ105cm、幅27cm、深さ13cmで、断面形はU字状である。間仕切りと考えられる。

清土層解説

- 1 におい褐色 ロームブロック・黒色土ブロック中量

竈 北東壁中央部の南寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは101cm、燃焼部幅は36cmである。袖部は、床面である第7層上面から第5層を積み上げて構築している。火床部は床面とはほぼ同じ高さである。火熱を受けた第7層上面が赤変硬化し、第6層の火床面を形成している。煙道部の壁外へ振り込み規模は4cmと短く、火床部から外傾している。第4層は袖部の崩壊土と考えられ、第2・3層が天井部材や内壁崩落及び煙道部からの流入土であることから、自然崩落している。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量（建物覆土第3層） | 4 灰黄褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量（袖部材崩壊土） |
| 2 におい黄褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量（天井部材崩落土） | 5 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物少量（袖部構築土） |
| 3 におい橙色 | 焼土ブロック少量、粘土ブロック・黒色土粒子微量（天井部内壁崩落及び流入土） | 6 明赤褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック中量（火床） |
| | | 7 明黄褐色 | ロームブロック多量（貼床構築土） |

ピット 4か所。P1～P3は深さ45～61cmで、配置から主柱穴と考えられる。第1・2層は、ロームブロックが含まれ、締まりが弱いことから、柱材を抜き取った後の埋め戻し土、第3層は、締まりが強いことから掘方埋土の残存と考えられる。P4は深さ25cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第2層の上層から88の坏が出土しているが、完形品ではないことから、投棄されたと思われる。

ピット土層解説（P1～P4共通）

- | | | | |
|--------|---------------------|---------|-----------|
| 1 明黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量 | 3 におい褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | | |

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径86cm、短径73cmの楕円形で、深さは49cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。覆土は5層に分層でき、ロームブロックが含まれることから埋め戻されている。第5層は、締まりが強いことから、最終段階で当層の上面が底面であった可能性がある。

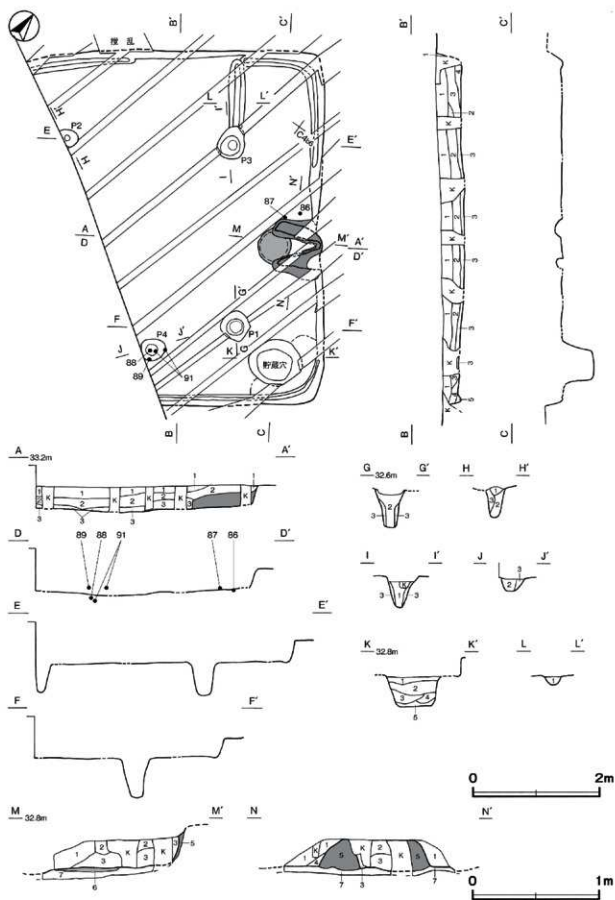
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 褐色 | 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量 | 4 灰黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 |
| 2 におい褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | 5 明黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック中量 | | |

覆土 5層に分層できる。第1・2層は黒色土を主体とした自然堆積である。第3層はロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。第4層は流入土、第5層は壁溝の覆土である。

土層解説

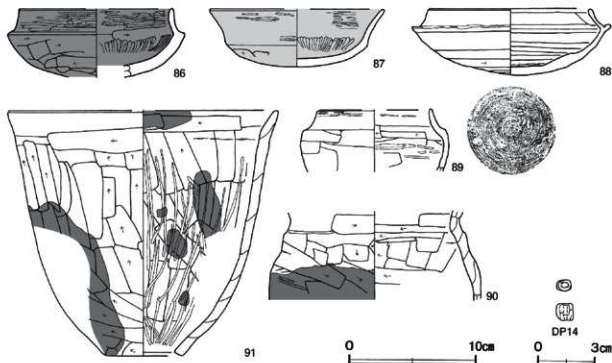
- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量 | | 炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量、焼土ブロック | 5 黄褐色 | ロームブロック中量 |



第 26 图 第 8 号野穴建物跡実測图

遺物出土状況 土師器片 339 点 (杯 38, 碗 2, 高杯 2, 小形壺 1, 甕類 293, 瓶 3), 須恵器片 3 点 (杯 1, 蓋 2), 土製品 1 点 (白玉), 石器 1 点 (砥石) のほか, 陶器片 2 点 (碗, 甕), 磁器片 1 点 (碗) が, P 4 や全域に散在して出土している。多くは上層とした第 1・2 層及び中層とした第 3 層の上層から破片で出土していることから, 投棄されている。86 の杯や 90 の甕, 91 の瓶は, 破断面に被熱を受けていることから, 破棄された後に投棄され, 焼かれた可能性がある。また出土地点が不明ながらも, 覆土下層から薄く煤が付着した DP14 の白玉が出土している。投棄された後に二次焼成を受けた可能性がある。

所見 時期は, P 4 で遺棄された須恵器の杯から 6 世紀中葉に比定できる。



第 27 図 第 8 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 27 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
86	土師器	杯	[120]	(5.4)	-	長石・石英・ 針状物質	褐灰	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナ デ後ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	30% 二次焼成
87	土師器	杯	[136]	4.7	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラナ デ後ヘラナデ 内面ヘラナデ後放射状磨き	覆土中層	10% 二次焼成
88	須恵器	杯	128	5.3	-	長石・石英・黒色 粒子・白色粒子	黄灰	良好	口縁部外・内面ナデ 底部回転ヘラ磨り	P4	70% P4 9 産直不明
89	土師器	小形壺	[8.8]	(4.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい 赤黒	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 底部外面ヘラ ナデ後磨き	覆土中層	30%
90	土師器	甕	-	(7.1)	-	長石・石英・雲母・ 礫	にぶい 橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 磨き 内面ヘラナデ	覆土上層	10% 二次焼成
91	土師器	瓶	[21.3]	19.5	(6.0)	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 磨き 内面ヘラナデ後磨き	覆土中層・P4	30% 二次焼成

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP14	白玉	0.8	0.9	0.2	0.63	石英・雲母・ 針状物質	純	一方向からの穿孔	覆土下層	二次焼成

第 9 号竪穴建物跡 (第 28 図)

位置 調査区中央部の B 3 d 3 区, 標高 33 m ほどの台地中央部に位置している。

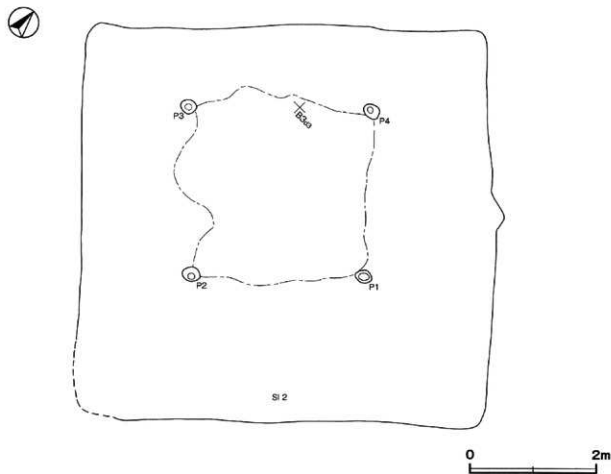
重複関係 第 2 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 第2号竪穴建物の構築時に壁などは壊されており、床の硬化部及び柱穴以外は確認できなかった。残存している床は長軸3.12m、短軸3.04mで、床の硬化部及び他の竪穴建物跡の形状から、方形と推定できる。主軸方向はN-42°-Eである。

床 平坦で、踏み固められている。

ピット 4か所。P1～P4は深さ33～47cmで、配置から主柱穴と考えられる。いずれも土層断面図の図化には至らなかったが、締まりが弱く、ロームブロックが含まれていたことから、柱材を抜き取った後の埋め戻しの可能性がある。

所見 第2号竪穴建物のほぼ中央部から確認できたことから、第2号竪穴建物の拡張前の建物である可能性がある。時期は、第2号竪穴建物の時期から6世紀中葉以前である。



第28図 第9号竪穴建物跡実測図

表2 古墳時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考
								土柱穴	出入口	ピット	伊・甕				
1	B 267	N-36°-E	方形・長方形	5.31 × (3.12)	34～43	平坦 (全周)	2	-	-	竈1	1	自然入為	土師器、須恵器	6世紀中葉	本影→SK18
2	B 343	N-44°-W	方形	6.58 × 6.35	43～48	平坦	一部	5	1	-	竈2	1	自然入為 土師器、須恵器、 土器品、石器、 石製品	6世紀中葉	SI 9→4跡 →SK19、21
3	B 346	不明	方形・長方形	(4.73) × (3.30)	42～46	平坦	東南	1	1	3	伊3	-	自然入為 土師器	6世紀中葉	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	(cm)				柱穴	出入口	ピット	貯・埋				
4	B 3b9	N-13°-E	方形	4.81 × 4.80	37-42	平黒	ほぼ 全周	4	1	-	竈	1	人為	土師器、須恵器	7世紀前期	
5	B 3c9	N-40°-W	[方形]	5.52 × (5.40)	45-59	平黒	(全周)	3	2	-	竈	2	自然 人為	土師器、須恵器、 土製品、石器	6世紀中葉	本館→SK23・24
6	B 4f1	N-35°-W	[方形]	6.15 × (4.02)	26-46	平黒	-	4	1	-	-	-	自然 人為	土師器、須恵器、 土製品	6世紀中葉	本館→SK23・24
7	B 4h3	N-34°-W	[方形]	6.32 × 6.30	35-42	平黒	-	4	2	-	竈	1	自然 人為	土師器、須恵器	6世紀中葉	
8	C 4b5	N-53°-E	[方形]	5.63 × (4.68)	32-34	平黒	ほぼ 全周	3	1	-	竈	1	自然 人為	土師器、須恵器、 土製品、石器	6世紀中葉	
9	B 3d3	N-42°-E	[方形]	(3.12) × (3.04)	-	平黒	-	4	-	-	-	-	-	6世紀中葉 前期	本館→S2	

(2) 土坑

第 38 号土坑 (第 29 図)

位置 調査区東部の B 3b9 区、標高 33 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径 0.84 m、短径 0.57 m の楕円形で、長径方向は N-24°-W である。深さは 71 cm で、底面は平坦で、南東部の径 18 cm ほどが硬化している。壁はほぼ直立している。

覆土 6 層に分層できる。第 1～3 層は、柱材を抜き取った後の埋め戻し土、第 4～6 層は掘方への埋土である。

土層解説

1 黒 褐色	黒色土ブロック少量、ロームブロック微量	4	に深い黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量
2 暗 褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	5	褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量
3 褐 灰色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	6	黄 褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量

遺物出土状況 土師器片 9 点 (坏 4、甕類 4、瓶 1) が出土している。いずれも第 1～3 層から出土した破片であることから、埋め戻し際に投棄されたものとみられる。

所見 底面に柱のあたりを確認したことから、性格は柱穴であるが、周辺には関連する遺構は確認できなかった。時期は、出土土器から 6 世紀中葉と考えられる。

第 38 号土坑出土遺物観察表 (第 29 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	土師器	坏	[116]	4.8	-	長石・石英・雲母・ 鉄状物質	橙	普通	口径部外・内面ヘラナダ後磨き 周りにヘラナダ 内面ヘラナダ後磨き	覆土 6 層	30%

第 39 号土坑 (第 29 図)

位置 調査区東部の B 3g9 区、標高 33 m ほどの平坦な台地上に位置している。

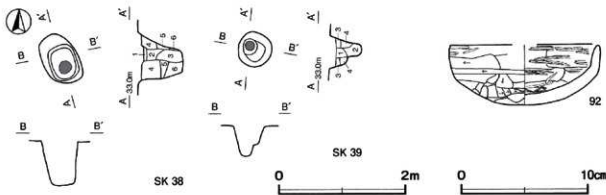
規模と形状 長径 0.55 m、短径 0.53 m の円形である。深さは 49 cm で、底面は有段を呈し、北西部の径 20 cm ほどが硬化している。壁はほぼ直立している。

覆土 4 層に分層できる。第 1・2 層は柱材を抜き取った後の埋め戻し土、第 3・4 層は掘方への埋土である。

土層解説

1 黒 褐色	黒色土ブロック少量、ロームブロック微量	3	に深い黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量
2 暗 褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	4	黄 褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量

所見 出土遺物はなかったものの、第 38 号土坑の付近で確認できたことや覆土が類似することから、時期は、6 世紀中葉の可能性がある。底面に柱のあたりを確認したことから、性格は柱穴であるが、周辺に関連する遺構は確認できなかった。



第29図 第38・39号土坑, 第38号土坑出土遺物実測図

表3 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
38	B 3 b9	N-24°-W	楕円形	0.84 × 0.57	71	平坦	直立	人為	土師器	柱穴
39	B 3 g9	-	円形	0.55 × 0.53	49	有段	直立	人為		柱穴

2 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堀跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

堀跡

第1号堀跡 (第30・33図)

位置 調査区東部のA 1 h5～B 2 b6区、標高33mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部及び南部が調査区域外に延びているため、長さは49mしか確認できなかった。A 1 h5区からN-107°-E方向にはほぼ直線に延び、B 2 b6区で南西方向(N-15°-W)へ屈折して延びている。上幅1.60～4.60m、下幅1.80～4.00m、深さ80～106cmである。底面はほぼ平坦であるが、改修前の堀跡が残存している部分においては凹凸や段を有し、底面は北西から南東へ緩斜している。壁は外傾もしくは外反している。

ビット 7か所。A 2 j2区で2か所、B 2 b5区～B 2 b6区で5か所が内壁に沿って確認できた。径7～14cm、深さ23～32cmで、不規則に並んでいる。P 6の覆土は2層で、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。コーナー部に位置することや重複関係などから、改修前の部分的な土留めや欄などが考えられるが、性格は不明である。

ビット土層解説 (P 6)

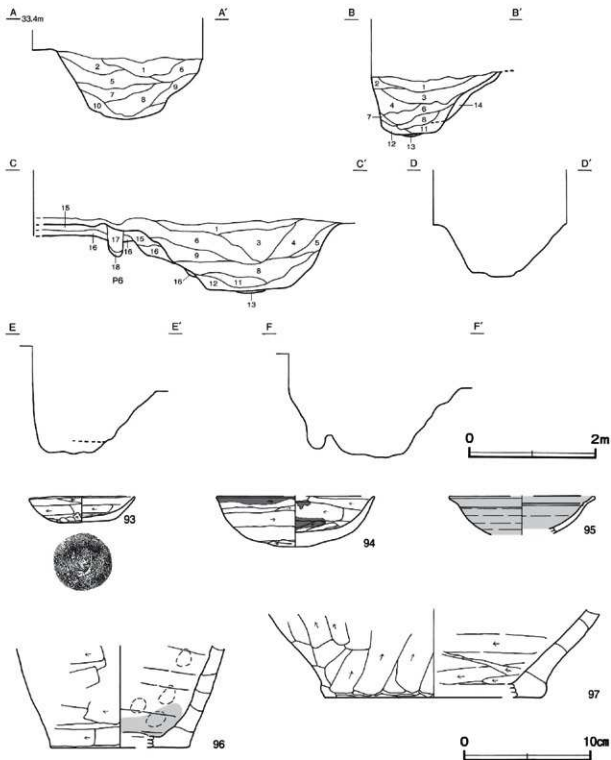
17 黒褐色 ロームブロック中量

18 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

覆土 16層に分層できる。第1～12層は改修後の覆土、第13層と第14～16層は改修前の覆土で、時期が異なると思われる。第1～3層は、ロームブロックがほとんど含まれていない自然堆積で、第4～11層は内壁及び外壁から複雑な堆積をしていることや各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第12～14層はロームブロックが含まれるもの、壁面や床面に接した層位であることから、壁面からの流入土と考えられる。第13・15層は黒色土主体の自然堆積層である。

土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------|-----------|---------------------|
| 1 灰青褐色 | ローム粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量 | 10 明黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 におい黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | 12 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 灰黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック中量 | 13 黒色 | ロームブロック・黒色土粒子少量 |
| 6 黒褐色 | 黒色土ブロック中量、ロームブロック微量 | 14 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 7 黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック微量 | 15 黒褐色 | 黒色土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 8 褐色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック微量 | 16 におい黄褐色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック微量 |



第30図 第1号堀跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器2点(小皿, 皿), 陶器片13点(碗5, 皿1, 鉢6, 甕1), 磁器片1点(青磁皿)のほか, 縄文土器片1点(深鉢), 土師器片284点(坏80, 甕類202, 瓶2), 須恵器片2点(坏, 裝飾器台), 陶器片6点(碗5, 皿1), 磁器片2点(小杯, 皿), 石器5点(砥石)が, 第1～12層にかけて出土している。細片は上層に多く, 完成品や比較的大形の破片は中層から下層にかけて出土している。中層から下層にかけて出土した遺物は, 埋め戻す際に投棄されたものと思われる。

所見 覆土の堆積状況から2回以上の改修が確認できる。第1期の覆土は第14～16層で, 段を有する断面形状から, 底面が一部残存していると推測でき, 最終段階の厩底より20cmほど高い。第2期は覆土の第13層のみで, 深く掘り下げる改修をしている。第3期は覆土の第1～12層で, 底面を広げている。廃絶時期は, 第3期の覆土に伴う土器から14世紀前葉と考えられる。

当該地には「原屋敷」の地名が残っており, 館に伴う堀跡と想定できるが, 内郭部は調査区域外に位置していることから断定はできない。宍戸氏が小鶴荘を改め, 宍戸荘を一円的に支配するのは14世紀以降であることから, 宍戸氏が入部する以前の郷村拠点であったと考えられる。

第1号堀跡出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	土師質土器	小皿	8.4	2.1	4.9	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	外・内面ヘラナデ 底部ヘラ切り後指ナデ	第3期覆土下層	65% PL10
94	土師質土器	皿	[126]	4.0	-	長石・石英・雲母・針状物質	明赤褐	普通	外・内面ヘラナデ	第3期覆土中層	80% PL10 二次焼成

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土/色調	文様・特徴	輪軸	産地	出土位置	備考
95	青磁	皿	[115]	[30]	-	黒色粒子/灰白	口縁部内面に滑り沈靨	青磁軸	河安窯々	第3期覆土中層	15% PL10
96	陶器	控鉢	-	[79]	[112]	黒色粒子・細礫に灰白	外・内面ヘラナデ 内面指頭痕	自然軸	常陸窯	第3期覆土中層	20% PL10
97	陶器	控鉢	-	[67]	[172]	黒色粒子・細礫	外・内面ヘラナデ 内面上位掌減底面砂目	自然軸	常陸窯	第3期覆土中層	20% PL10

3 その他の遺構と遺物

今回の調査では, 時期や性格が明確でない溝跡1条, 土坑40基, ビット群1か所を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

(1) 溝跡

第2号溝跡(第31・33図)

位置 調査区西部のB 4 i2～B 4 j1区, 標高33 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第25・26号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部及び南部が調査区域外に延びているため, 長さは13.85 mしか確認できなかった。B 4 j1区からN-20°-E方向にほぼ直線的に延びており, 上幅1.10～2.00 m, 下幅0.40～1.13 m, 深さ40～53 cmである。底面はほぼ平坦であるが, 底面は南から北に緩斜している。壁は外傾している。

ピット 8か所。B 4 f2～B 4 i1 区の内壁に沿って、底面で確認できた。径12～16cm、深さ20～39cmである。P 1・P 8は西壁沿い、P 2～P 7は東壁沿いに掘り込まれ、単体もしくは不規則な間隔で存在している。部分的な土留めなどが考えられるが、性格は不明である。

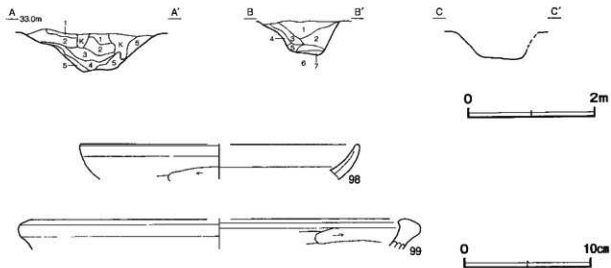
覆土 7層に分層できる。第1層は微量のローム粒子を含む自然堆積、第2～4層はロームブロックが含まれることから埋め戻し土、第5・6層はロームブロックが含まれるものの、壁面や底面に接した層位であることから、壁面からの流入土である。第7層は底面への流入土であるが、締まりが強いことから、第5・6層とは堆積時期が異なると考えられ、1回以上、底面の堆積土を浚っていると思われる。

土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック・機土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、黒色土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 濃い黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、瓦質土器片1点(焙烙)、石器1点(砥石)のほか、土師器片153点(環31、莖類122)、須恵器片1点(蓋)、石器1点(砥石)が、覆土上層から下層にかけて出土している。細片であることや周辺に堅穴建物跡が存在していることから、多くは埋め戻し際に混入したと思われる。

所見 時期は18世紀後葉の可能性はあるが、伴う出土土器が少ないことから不明である。性格は、区画と考えられる。



第31図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
98	瓦質土器	焙烙	[222]	(2.8)	-	石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	外・内面ヘラナデ 口径部折り返し	覆土中	5%
99	土師質土器	焙烙	[320]	(2.4)	-	石英・雲母・黒色粒子	濃い黄褐色	普通	外・内面ヘラナデ	覆土中	5%

(2) 土坑 (第33図)

時期を特定できない土坑40基について、一覧表を掲載する。出土遺物が少なく細片であること、伴う遺物が出土しなかったことなどから、時期は決定できなかった。

表4 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	A 2g5	N-76°-W	[楕円形]	0.84 × (0.56)	118	平坦	外傾	人為		
2	B 2a6	N-49°-E	[長方形]	(1.56) × 0.91	19	平坦	縦斜	自然		SD 1、SK 3 → 本跡
3	B 2a6	N-63°-W	楕円形	1.38 × 1.15	23	平坦	縦斜	人為		本跡 → SK 2
4	B 2a6	N-7°-E	楕円形	0.30 × 0.25	81	平坦	外傾	人為		
5	B 2a6	N-65°-W	楕円形	0.43 × 0.38	60	平坦	外傾	人為		
6	B 2c0	N-83°-W	楕円形	0.41 × 0.34	23	平坦	外傾	人為		
7	B 2c9	N-69°-W	楕円形	0.72 × 0.57	20	平坦	縦斜 外傾	人為		
9	B 3b1	-	円形	0.69 × 0.63	51	皿状	外傾	人為		
10	B 2c9	N-27°-E	楕円形	0.80 × 0.60	80	有段	外傾	人為		
11	B 2c8	N-78°-E	楕円形	0.29 × 0.21	75	平坦	直立	人為		
12	B 3d1	N-56°-E	[円形・楕円形]	(0.62) × (0.14)	5	平坦	縦斜	人為		本跡 → SK13
13	B 3d1	N-50°-E	隅丸長方形	1.40 × 0.70	17	平坦	縦斜	自然		SK12 → 本跡
14	B 2c9	-	円形	0.49 × 0.46	49	皿状	外傾	人為		本跡 → SK29
15	B 3e4	N-21°-W	[楕円形]	(2.80) × (2.08)	17	平坦	縦斜	人為	土師器	
16	B 3e7	N-23°-E	隅丸長方形	0.90 × 0.72	29	皿状	外傾	人為		
17	B 3c5	N-83°-E	楕円形	0.66 × 0.51	17	平坦	縦斜	人為		
18	B 2b8	N-69°-E	楕円形	1.67 × 1.25	35	平坦	縦斜	人為	陶器、磁器	SI 1 → 本跡
19	B 3c2	N-11°-E	[長方形]	1.73 × [1.16]	22	平坦	縦斜	人為		SI 2 → 本跡
20	B 3c9	N-80°-W	[円形・楕円形]	(2.13) × (0.60)	39	平坦	縦斜	人為		
21	B 3c2	-	円形	0.60 × 0.55	20	平坦	外傾	人為		SI 2 → 本跡
22	B 3c2	-	円形	0.59 × 0.55	25	平坦	外傾	人為		
23	B 3c9	N-18°-E	[長方形]	(3.89) × 0.80	27	平坦	外傾	人為	土師器	SI 5 → 本跡 → SK24
24	B 3c9	N-15°-E	[長方形]	(2.39) × 0.83	41	平坦	縦斜 外傾	人為	土師器	SI 3、SK23 → 本跡
25	B 4g2	N-88°-E	楕円形	0.50 × 0.26	41	皿状	外傾	人為		SD 2 → 本跡
26	B 4g2	N-88°-E	[楕円形]	(0.46) × 0.34	38	皿状	外傾	人為		SD 2 → 本跡
27	B 3c9	N-35°-W	楕円形	0.90 × 0.80	10	平坦	縦斜	人為		
28	B 3f0	-	円形	0.77 × 0.71	47	皿状	外傾	人為		
29	B 2c9	-	円形	0.95 × 0.94	25	平坦	外傾	人為		SK14 → 本跡
30	B 3f0	-	円形	0.35 × 0.33	20	皿状	外傾	人為		
31	B 3f0	N-30°-E	楕円形	0.88 × 0.76	25	平坦	外傾	人為		
32	B 3b0	N-59°-E	[円形・楕円形]	(0.77) × (0.52)	19	皿状	縦斜	人為		本跡 → SK40
33	B 4f2	N-66°-W	[方形]	0.90 × (0.68)	50	平坦	直立	人為		SI 6、SK34 → 本跡
34	B 4g1	N-17°-E	[長方形]	(3.20) × 0.55	21	平坦	外傾	人為		SI 6 → 本跡 → SK33
35	B 3g8	-	円形	1.02 × 0.99	18	平坦	縦斜	自然		
36	B 3g9	N-70°-W	楕円形	0.81 × 0.73	22	傾斜	縦斜	自然		
37	B 3g9	-	円形	0.58 × 0.58	20	平坦	外傾	人為		
40	B 3b0	N-28°-E	楕円形	1.24 × 1.08	32	皿状	縦斜	人為	土師器	SK32 → 本跡
41	B 3g0	N-29°-E	楕円形	0.89 × 0.79	25	皿状	外傾	人為		
42	B 4j2	N-72°-W	楕円形	0.39 × 0.33	27	平坦	縦斜	人為		
43	C 4a4	N-20°-E	楕円形	0.41 × 0.27	28	平坦	外傾	人為		

(3) ビット群

第1号ビット群 (第33図)

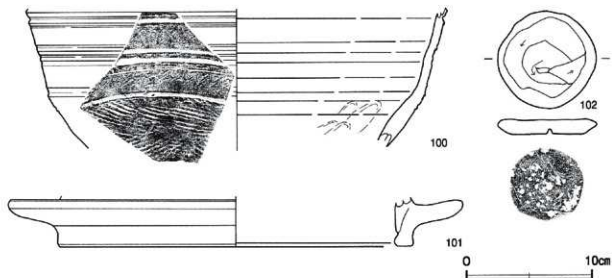
位置 調査区中央部のB3e7～B3f8区、標高33mほどの平坦な台地上に位置している。東西340m、南北250mの範囲から、ビット3か所を確認した。

規模と形状 平面形は長径53～70cm、短径52～62cmの円形または楕円形で、深さは25～45cmである。ビットの分布状況は、P2を交点にP1・P3がほぼ直交しているが、建物や柵などは想定できない。

所見 時期、性格ともに不明である。

(4) 遺構外出土遺物 (第32図)

遺構に伴わない遺物について、各時代の特色ある遺物を抽出し、実測図、拓影図、遺物観察表を掲載する。



第32図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
100	須臾器	裝飾器台	-	(11.0)	-	長石・石英・白色粒子	灰	灰成	外面磨り込線による3区画。上・中区画内に4食纤袋1単位の波状文。下区画内帯き。底部内面下部に当て具痕跡が指し。自然軸位置。	第1号環跡覆土中	10% PL.9 土毛群等
101	土師器	織罎	-	(3.9)	[28.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	明黄褐色	普通	外・内面ヘラナデ。鈎部断面に折り返し。	第1号環跡覆土中	5%
102	土師器	磁罎 もしくは 赤白磁罎	-	-	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラナデ。外縁部研磨。底部回転糸切り。底部中心部に穿孔痕。	第1号環跡覆土中	20% 重底部転用器具

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の発掘調査では、古墳時代後期の堅穴建物跡9棟、室町時代の堀跡1条のほか、溝跡1条、柱穴を含む土坑42基、ピット群1か所を確認した。堅穴建物跡のうち、7世紀初頭の第4号堅穴建物跡と第2号堅穴建物跡の拡張前の建物の可能性がある第9号堅穴建物跡を除けば、いずれも6世紀中葉に廃絶された堅穴建物跡と考えられる。以下、6世紀中葉の堅穴建物、出土土器の組成と系譜等について記述する。

2 6世紀中葉の堅穴建物について

今回の発掘調査で確認できた6世紀中葉の堅穴建物跡は、第1～3号堅穴建物跡と第5～8号堅穴建物跡である。これらの堅穴建物跡は、段階的に埋め戻された覆土の堆積状況や、二次焼成を受けた遺物の年代と出土状況から、同時期に廃絶されたと考えられる。また堅穴建物跡から確認できた出入り口施設と考えられるピットは、調査区の制約を受けた第1号堅穴建物跡を除けば、すべて南東壁際に位置している。こうした共通事項から、少なくとも第1号堅穴建物跡を除いた他の堅穴建物跡は、下連田遺跡における6世紀中葉の集落を構成していた一部と考えられる。あるいは覆土の堆積状況や遺物出土状況を重視すれば、第1号堅穴建物跡も含めて集落を構成していた可能性もある。

集落を構成していた堅穴建物跡は、いくつかの小集団としてのまとまりが考えられる。当跡の発掘調査で確認できた堅穴建物跡においては、主軸方向と内部構造によって、AからCの小集団に分けることができると思われる。

小集団Aは、調査区域内で最も大型の堅穴建物跡である第2号堅穴建物跡を中心とした集団と想定できる。第2号堅穴建物跡は、主軸方向がN-44°-Wで、出入り口施設が南東壁際に位置し、それに対峙する北西壁に竈が構築された後、北東壁へ竈が移設されている。これと酷似した主軸方向や内部構造が認められるのは、第5号堅穴建物跡である。主軸方向はN-40°-Wで、南東方向の出入り口施設に対峙する北西壁に竈が構築され、意図的に壊されていることから、北東壁への移築が想定できる。第2号堅穴建物跡との相違点は炉跡が存在し、堤状施設を有する点で、古墳時代中期の堅穴建物の特徴が継承されている。また、第3号堅穴建物跡は調査範囲の制約により、全貌は解明できなかったが、炉跡や堤状施設の存在から第5号堅穴建物跡との特徴が一致し、小集団Aに含まれる可能性がある。複数の炉跡が確認できたことから、竈が導入される以前に建てられた可能性がある。

小集団Bは、第2号堅穴建物跡に次ぐ規模をもつ第7号堅穴建物跡を中心とした集団と想定できる。第7号堅穴建物跡は、主軸方向がN-34°-Wで、出入り口施設が南東壁際に位置し、それに対峙する北西壁に竈が構築され、張り出し施設を有している。これとほぼ同じ主軸を有する第6号堅穴建物跡は、主軸方向がN-35°-Wであり、第8号堅穴建物跡についても、出入り口施設から主軸を割りだせば、N-38°-Wとなり、同一の小集団を構成していると考えられる。張り出し施設を伴う堅穴建物や竈は、古代に存在した香取海沿岸と東京湾沿岸の集落との関連性や交流によって波及していくとする視点もあり¹⁾、当跡における竈の導入も、こうした方面から湖沼・湖沼前川水系を介しての集団や技術を集落内へ取り込むことによってもたらされたと推測できる。

小集団Cは、第1号堅穴建物跡のみであるが、確認できた位置から小集団の縁辺部に位置する堅穴建物

と考えられる。段階的に埋め戻された覆土の堆積状況や遺物出土状況は、小集団 A・B を構成する竪穴建物跡と一致するが、一方で竈の煙道部が長く掘り込まれ、他の小集団の竪穴建物跡で確認できた竈の構造とは異なっている。こうした視点からすれば、小集団 C が小集団 A・B と共に同一の集落を構成していたかは不明であるが、仮に同一の集落に存在していたとするならば、調査区域内では最も新しく編成された小集団と考えられる。

以上のように当跡の発掘調査区域においては、2～3の小集団が想定できる。第2号竪穴建物跡の貯蔵穴からは威信財と思われる須恵器の広口壺や提瓶が遺棄されていることから、少なくとも他の小集団の中では上位に位置していたと考えられ、あるいは該期の当集落においても、第2号竪穴建物跡が含まれる小集団 A が、中心的役割を果たしていた可能性がある。これらの竪穴建物跡の廃絶年代は同時期であり、出土遺物や重複関係から竪穴建物跡の形態変遷を追うことは難しいが、竈の導入においては、前述のことから第7号竪穴建物跡を取り巻く集団の影響が大きいと考えられる。第2・5号竪穴建物跡における当初の竈の付設位置は、第7号竪穴建物跡と一致しているものの、その後、第2・5号竪穴建物で移築された竈の位置は、他の集団内の竪穴建物にも同じ位置で竈が付設されている。これを集落内の統一性とみるか、出入り口施設と貯蔵穴との位置関係からの利便性とするかは判断し兼ねるが、炉から竈へ、竈の移築位置、堤状施設の消長などからみた場合、小集団 A では、第3号竪穴建物から第5号竪穴建物、第2号竪穴建物の順で、小集団 B では、第7号竪穴建物から第8号竪穴建物の順で建てられたことが想定できる。

3 出土土器の組成と系譜

当跡から出土した土師器の構成については、埴や高坏は極めて少なく、組成の中心は坏・椀類と甕類には限定される。こうした組成は、埴や高坏を伴う古墳時代中期の器種組成とは異なり、後期の様相となっている。しかしながら、坏・椀類を単体でみると、和泉式の系譜を引くものや須恵器の坏蓋・坏身の模倣坏が認められる。当跡においては、竪穴建物跡や該期の遺構間の重複関係が乏しいことや上記の特徴がみられる坏・椀類が混在して廃棄されていることから、竪穴建物の創建・使用年代や土器の編年を考察することは難しいと思われる。ただし、土器の様相が類似する稲敷市堂ノ上遺跡における編年²¹を用いた場合、Ⅲ～Ⅴ期の土器が該当すると考えられるも、6世紀前葉の坏・椀類が中葉にまで継承される特徴がみられる。また、甕類においても同様で、竈の導入によって形状が変化した長胴型と竈の導入以前の炉による煮沸に適した丸形の体部を有する甕類が継承され、やはり混在している。こうした器種の形状の多様性には、炉から竈へ変容していく過程で、それぞれの機能性に合わせた甕類の形状の変化と継承、時期ごとに移入される須恵器坏、及びその模倣坏の段階的な形式変化と在地化などが背景として考えられ、堂ノ上遺跡の編年においても補足されているように、軌を一にした形式変化はあり得ないといえる。

一方、須恵器は数こそ少ないながらも、6世紀中葉の特徴的な製品が出土している。生産窯については、判断がつかなかったが、技法の在り方から、上毛野地方（現在の群馬県）もしくは当該地域の技法を有した集団によって生産された可能性のある製品が認められる。

群馬県金山丘陵の窯跡群で出土した甕や広口壺は、5世紀後葉から末葉にかけて、陶邑窯や他地域では認められていない口縁部に波状文を施す特徴があり、この技法はその後継承されて、他の製品も含めて一定量の生産がされている。また補強帯を有する甕ではあるが、4段区画の波状文は利根川以西に、3段区画は利根川以東に多くみられる傾向や、体部の螺旋状ナデや沈線が猿投窯から上毛野地方へ導入され、継承されたと考えられている³¹。こうした特徴は、第2号竪穴建物跡の貯蔵穴から出土した広口壺（42）にみられる。

提瓶は6世紀前葉から中葉にかけて、体部の膨らみが大きくなる特徴がみられ、湖西窯などでは鍵手状に変遷する把手が、上毛野地方では環状把手としてその後も継承されている。また背部の閉塞技法に絞り込みや粘土盤貼り付けが用いられている⁴⁾。こうした特徴は、第2号堅穴建物跡の貯蔵穴から出土した2個体の提瓶(43・44)の技法と一致している。

坏は6世紀中葉以降、底面に手持ちヘラ削りの技法が用いられる特徴があり、その後に出現する平底の坏に継承されることから⁵⁾、第5号堅穴建物跡出土の坏(60)は、上毛野地方の技法とみられる。

これらの技法を有した須恵器は、利根川水系から香取海を介し、潤沼・潤沼前川水系を用いた搬入路が推定され、竈の導入と併せて考えると、広域な地域間交流が想定され、古墳時代中期の生活様式から後期へ大きく移行していく過程が考えられる。

4 焼却された堅穴建物跡と祀りについて

古墳時代中期の集落跡には、短期間で集落を廃絶したと考えられる重複関係をもたない堅穴建物跡群や、堅穴建物の廃絶に際し、意図的に焼失させる事例が多く認められている。6世紀中葉とはいえず、当跡における集落の廃絶においては、古墳時代中期の様相を残しながら後期へと移行していると考えられる。ただ、本跡で発掘調査した堅穴建物跡には、第2号堅穴建物を除いて、罔化出来ない程度の炭化材しか散在しておらず、中期の堅穴建物跡にみられる焼失状況とは異なることから、焼却として扱いたい。

当跡における堅穴建物の廃絶については、共通した覆土の堆積の在り方から解釈できる。上屋を解体した後、柱穴や貯蔵穴などを埋め戻し、流入土、焼土を含む埋土、焼土を含まない埋土の順で堆積しており、焼土を含む埋土からは、二次焼成を受けた土器が出土している。また二次焼成を受けた土器は、被断面に煤が付着しているものや接合面で煤付着の有無が明確に分かれている土器が存在すること、出土量の割には接合関係が乏しい特徴がみられる。このことは、堅穴建物跡が段階的に埋め戻され、埋め戻しの途中で意図的に破砕した土器を投棄し、焼却させていると考えられる。さらに追加すると、堅穴建物に付設されている竈には、袖部の崩壊土が確認されており、堆積した流入土と照合すると、上屋解体後に空白の時間帯があり、その後焼却して廃絶していると考えられる。このことは、上屋解体時には移転先にすでに住み家が建てられていると思われることから、流入土の堆積時には家財の搬出や新集落内の整備などの期間が当てはまり、元の集落へ戻り堅穴建物を焼却させる、言わば集落廃絶のための祀りがおこなわれたことが推察できる。

こうした祀りは、当集落の中心的人物によって催されたと考えられ、第2号堅穴建物跡がその中心となったのは言うまでもない。第2号堅穴建物跡における遺物の出土状況は、貯蔵穴へ広口壺と2個体の提瓶を遺棄した後、3群を遺棄し、2群・1群の出土遺物の順で投棄されている。広口壺と提瓶は二次焼成を受け、提瓶はいずれも同部分の把手が意図的に打ち欠かれていたことから、埋納された可能性が高い。3群の遺物はミニチュア土器や玉類が多く、清めの可能性があり、焼土を含む埋土中やその上位に位置する2・1群は、坏・椀類から甕類の順で投棄されており、特徴的な二次焼成を受けている。祀りの際の食膳具や供献具、依り代として用いられた可能性がある。

『常陸国風土記』那賀郡の条にみられる嘯時風山の説話には、神の子とされる蛇を清らかな坏から瓮へ安置したり、瓮を投げつけられて霊力を失う神の子の姿が描かれている。また、『古事記』や各地の『風土記』などには、貴人に化けた神の正体を知って死の返礼を受ける人々や霊力を封じられ人々に追い出される神々の姿が描かれており⁶⁾、神々に対する畏敬の念と神の領域を侵す人々の二面性が伺われる。

焼却した堅穴建物跡について、中期の集落である島名前野東遺跡では、土地を戻す＝「自然(神)に返す」

といった浄化行為として神々への畏敬の念に着目している⁷⁾。一方、後期の当該地においては、該期に集落が増加する傾向があり、未開の地に開発行為が進行したと考えられる。この開発こそ神々の領域を侵すことであり、短期間で集落を廃して集落を移す行為は、集落主の支配域を拡大させ、生産基盤を強固にしたと考えられる。集落が増加する背景には、他地域からの人々の移住は勿論、技術の伝播や物流の発達による交流、あるいは集落を削いで、多方面の開発に着手したことも推測できる。

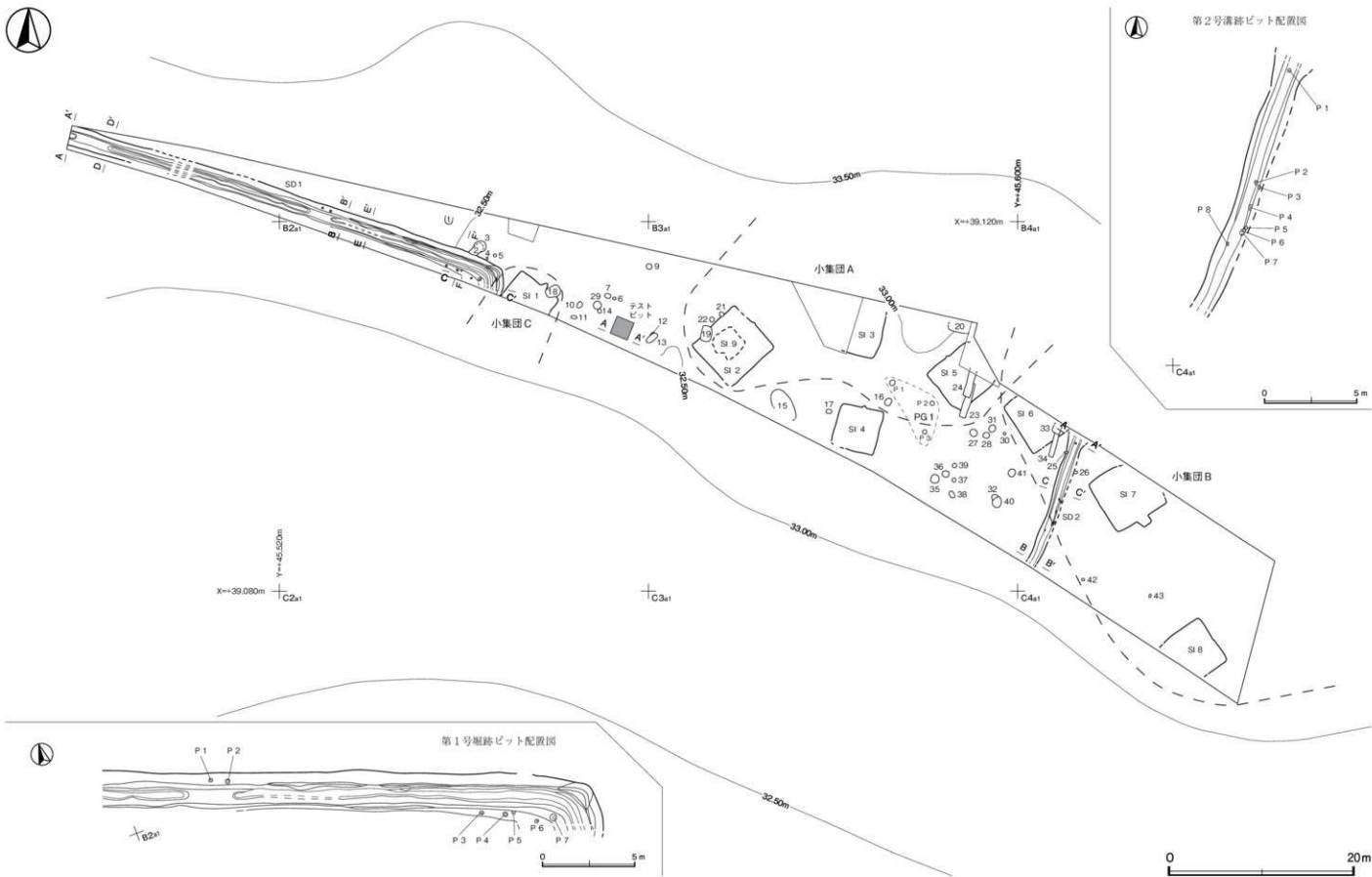
当跡では集落を廃した後、廃した集落へ人々が集い、祀りをおこなったことが推察できる。こうした行為は、集落の廃絶に伴う祀りであると共に、多方面の開発に着手していた同族間の結束を確認し、あるいは依り代としていた土器を破砕して投棄し、焼くことによって神々の靈力を封じる祀りであったようにも思われる。

5 おわりに

当跡の主要遺構について記したが、当跡の6世紀中葉における祀りの様相はある程度明確になったものの、祀りの世界観については不明な事柄も多い。神話や説話の世界は、当時の祀りの世界観と深く結び付いていると考えられるが、時代の背景が不明な部分もあり、考古資料と直接的に結びつけることは、現段階では危うい点も多いと思われる。しかし、遺物の出土状態や出土遺物を詳細に観察・検討することによって、当時の祀りの様相が、解明される可能性は十分にありえる。今後の資料の蓄積と分析に期待したい。

註

- 1) 作山智彦 「釜ノ上遺跡における食膳具の様相」『年報28』財団法人茨城県教育財団 2009年7月
- 2) 註1に同
- 3) 酒井清治ほか『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒澤大学考古学研究室 2009年5月
- 4) 註3に同
- 5) 註3に同
- 6) 内原町史編さん委員会 『内原町史』通史編 内原町 1996年3月
- 7) 飯泉達司「鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第215集 2004年3月



第33図 下遠田遺跡遺構全体図

写 真 图 版



第2号竖穴建物跡出土土器

第1号竖穴建物跡
遺物出土状況



第1号竖穴建物跡
完掘状況



第2号竖穴建物跡
遺物出土状況





第2号竖穴建物跡
遺物出土状況



第2号竖穴建物跡
完掘状況



第3号竖穴建物跡
完掘状況



第4号竖穴建物跡
完掘状況



第5号竖穴建物跡
遺物出土状況



第5号竖穴建物跡
完掘状況

PL4



第6号竖穴建物跡
完掘状況



第7号竖穴建物跡
遺物出土状況



第7号竖穴建物跡
完掘状況



第8号竖穴建物跡
P4遺物出土状況



第8号竖穴建物跡
完掘状況



第1号堀跡
遺物出土状況



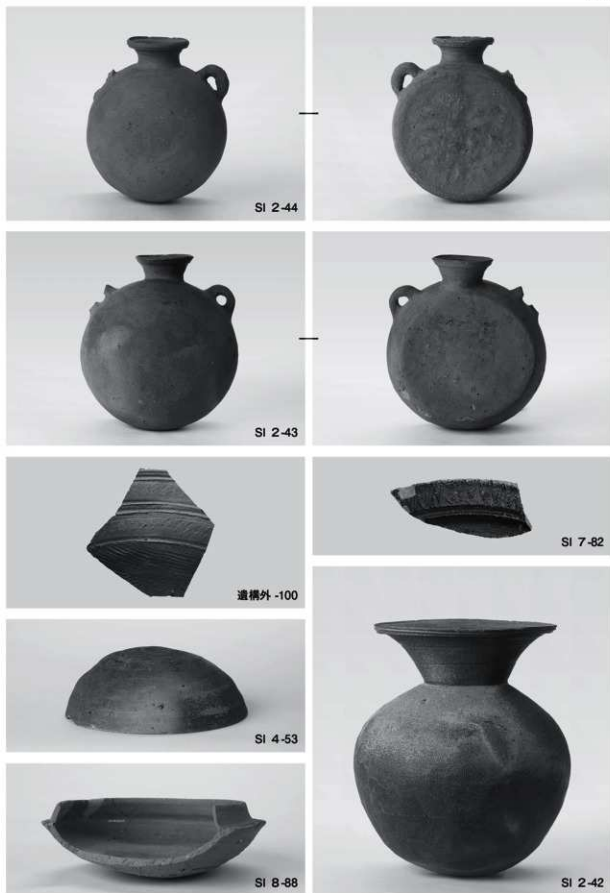
第2·4·7号竖穴建物跡出土土器



第1·2·5·7号竖穴建物跡出土土器



第2・7号竖穴建物跡出土土器



第2・4・7・8号竖穴建物跡，遺構外出土土器

PL10



第2・4・5・6・7号竖穴建物，第1号堀跡出土土器，土製品，石器・石製品

抄 録

ふりがな	げどおだいせき							
書名	下速田遺跡							
副書名	一般県道友部内原線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第398集							
著者名	田村雅樹							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2015(平成27)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
下速田遺跡	茨城県水戸市五平町 342-1番地ほか	08305 179	36度 35分 13秒	140度 34分 11秒	33m	20130401 ~ 20130531	1,487㎡	一般県道友部 内原線道路改良事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
下速田遺跡	集落跡	古 墳	竪穴建物跡 土 坑	9軒 2基	土師器(坏・椀・壺・甕・ ミニチュア土器) 須恵器(坏・蓋・裝飾器台・ 広口壺・提瓶) 土製品(支脚・土玉・甕玉) 石製品(砥石・紡錘車・臼玉)			
	館跡	室 町	堀跡	1条	土師質土器(小皿・皿) 磁器(青磁皿) 陶器(鉢)			
	その他	時期不明	溝跡 土坑 ピット群	1条 40基 1か所				
要 約	古墳時代後期の集落跡と室町時代の館跡に伴う堀跡を確認した。6世紀中葉に廃絶された集落で、竪穴建物の付帯施設である炉から竈への移行期、堤状施設の消滅期に当たると考えられる。複数の竪穴建物跡は、覆土の堆積状況が酷似することや、二次焼成を受けた遺物が同じような状況で出土していることから、同時期に廃絶されたと考えられる。調査区域で確認できた最大の竪穴建物跡においては、貯蔵穴に須恵器の広口壺と2個体の提瓶が遺棄され、その後ミニチュア土器と玉類、坏・椀類、甕類の順で遺棄や投棄がされている。集落の廃絶に伴う祀りと考えられる。 また堀跡からは、14世紀前葉の遺物が出土している。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON ES-1000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第398集

下遠田遺跡

一般県道友部内原線道路改良事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成27(2015)年 3月13日 印刷

平成27(2015)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL 029-253-5551